昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
復刊第二九号（通巻第二五九号）
昭和二十八年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）

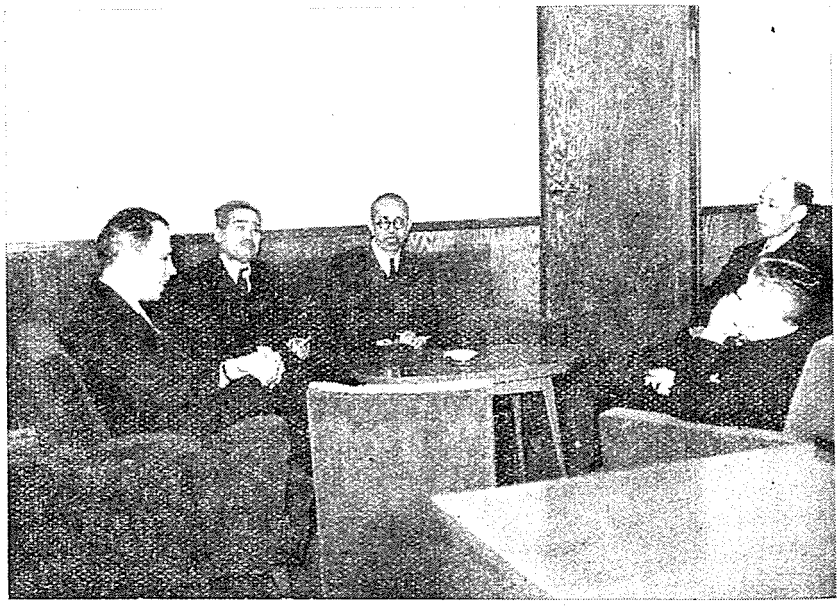
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, May 15th, 1953. No. 259

關西大學學報

第 2 5 9 号

昭 和 2 8 年 5 月



大學ホールで懇談するフアーズ氏

關 西 大 學 學 報 局

前者の轍

最近東京の某大学の一学部にPTAならぬPPA組織が作られ大学当局と父兄が賛成し学生は〃子供扱い〃と不満の意を表しているというニューズが新聞紙上に報ぜられた（五月七日付朝日夕刊）。事の起りは今春卒業式当日になつて始めて子供が卒業出来ないのを知つた父兄の熱望によつて大学当局が発案し、差当つて本人に渡す履修表のコピーを直接父兄に郵送することになり、早速その予算を計上し本格的にPTA組織に迄発展させるというにある。四年で卒業出来ないものがその三分の一もあり尚一、二年の履修が必要があると聞いた父兄の驚きもさること乍ら、それらの訴えで容易にPTA組織を作る態度はその事件が偉大なる創設者の建学の理想を高く掲げその伝統と学風を誇る大学で起つただけに注目されるものである。しかしこの事からわれわれが考えさせられることは何故こうした事件が起つたのかという問題である。事件が唯著名な大学に起つたからこれに深い関心を寄せるというのみではなく、こうした事が他の大学の内部にも何らかの契機を見出して行われる可能性が充分に包蔵しているのではないかと云うことを恐れるのである。結論を先きに述べるならばかかる大学に於けるPTA的組織を作らねばならなくなつたということは、即ち自ら大学の権威の座を下るものであり、大学教育の堕落であり、同時にそれに対する父兄の無言の批判であり抵抗である。結局両者から自覚ある社会人というプライドに不信任状をつきつけられた格好の学生は有難迷惑であろう。何れにしろこの場合三者の立場からの言い分はあろうが、その原因は容易に解決出来ないものを含んでいるのである。その最大の原因は、大学教育がマス・プロ化によつて、その限界に達したと云うことである。換言すれば多数の学生を抱えた大学の個々の学生に対する指導の密度が稀薄になり個人指導乃至は最高の教養をもつ社会人の形成に手がとゞかなくなつたことであり、その歳費を国庫支出で賄われる国立大学に対して私立大学の教育上及び経営上の悩みが大きくクローズ・アップして来たのである。云う迄もなく各大学は何れも特色ある教育方針を建学の理想の上に高く掲げ一意その貫徹に努力して来たのであるがその教育方針すら無視しなければならなくなつた程情況が緊迫したのである。大学として要求される施設、教授陣等の整備拡充に伴う支出は年と共に増大するのに反し戦後一時盛んであつた寄附金集めも殆んど頭打ち状態とあつては収入の殆んどが授業料収入の増加、消極的には収容人員の増加によつて賄われる結果となつたのは必然的な宿命である。四年課程を順調の卒業出来なかつた学生がかくも多数あつた事は学生の勉学態度以上に大学当局に大きな欠陥があつたのではないと疑はれる。かつて大学生活は「掲示板に始まり掲示板に終る」と評されたことがあつたが、その裏面には当局の個々の学生に対する知性ある人格者として充分な配慮がうかがわれたものである。それだけにむかしの学生は幸福であつたという。現在も掲示板に始まつてはいるが、手が届きかねるという学生は不幸な生活を送つているわけであり、こうした事実は本学に於いても屢々見受けられ過去数年間にあつてもそうした声が聞かれないこともなかつたが幸いにして自らその権威の座を下りることはなかつた。勿論卒業出来ない学生が多数あつた事もあつた。例えば今年文学部のある学科で多数の卒業不能者が出たが、それは卒業論文の不合格が理由であつた。担任の某教授は、折角四年間努力したものでありこうしたことで卒業出来ないということは非常に気の毒である、私も出来る限りの指導もし、助力もしたが、学問の真理に対して許し難い欠陥のある論文は馬稜を斬る格好となつた。私の指導の尚至らなかつたことは深く恥じる、だが私は学問的良心に対して最後の一線を守つた事は誇りに思う、と語つていたがすべての大学がその権威の為にあらゆる悪条件と戦いつゝも反面その限界の為その戦いを棄てるの止むなきに至るのは現在大学の悲劇である。悲劇を再び繰返してならない。大学人のすべての大学の権威に反しその進展を阻害する非良心的行為は徹底的に糾弾し排除されなければならない、多聞に洩れず辛うじて唯学問的良心によつてのみ限界を支えている本学はこの前者の轍をどう見るであろうか。

マリ・ド・フランス

フランス最古の女流詩人

三木　治

元来私は女流作家は余り好まない、男尊女卑と叱られるかも知れないが、上手に書いておれば癪にさわるし、下手だと阿呆らしくて見てはおられない。ところが相憎くと文学の国フランスにはどうしても知らん顔をしておれない聞秀作家が少くない。古くはマダム・ド・セヴィネ、マダム・ド・ラ・ファイエットをはじめとして、ジョルジュ・サンド、スタール夫人、近くはコレット、ノアイユ夫人など百花繚を競ふ有様であるが、これら女性群の最古のものがマリ・ド・フランスである。

彼女の作品として特に有名なのは「短詩」(Les Lais) と名づけられてゐる十数篇の短かい韻文体の物語であるが、今その一、二を簡単に紹介すると、

『王妃との恋の故に逆鱗にふれて王のもとを放逐されたトリスタンは一年の間故郷に帰つてゐた、しかし思慕の念おさへ難く、ひそかに郷里を去つて、昼は森の中を歩み、夜は貧しい人々に宿を乞うて王城の地にたどりついた、そして王の動静をたづねれば、この復活祭に王はタンタジェルの町に諸臣を集め、祝宴をはり、王妃も必ずそれに参列する、と。彼は王妃に自分の来たことを知らせんと、彼女の通る森に隠れ、榛の枝を四角に削り、自分の名を書きつけて、それを通路に置く。王妃イズーはそれに気付き、行列をとどめ従者をしりぞけて、一人林中深くわけ入つてトリスタンにめぐり逢ふ。彼は王妃に、二人の間は、たとへば榛と忍冬(すいかづら)のやうに、互ひにまとひ合つてゐてこそ、両方は生きられるが、無理に引離されればともどもに枯れてしまう。「ちようど吾々もこのやうに、私なければあなたも無く、あなたなければ私も無い」と訴へる。しばしの逢瀬を楽んだイズーは、やがて王へのとりなしを約してトリスタンと別れた。この再会の喜びに琴の巧みなトリスタンは一曲を作つた。「忍冬」がその曲の名前である。(忍冬(すいかづら))』

『サン＝マロの地に二人の騎士が住んでゐた、一人は独身、他は美しい妻を持つてゐる、独り身の騎士は隣家の妻を激しく恋し、やがて二人は想思の間柄となつた、しかし余人に知られてはならなかつた、幸ひ二人の住居が隣り合つてゐたため、夫人は寝室から隣りの騎士を眺め、心と、眼と、口とで愛情を伝へ合ふことは出来てゐた。楽しく、やるせない恋は暫く続いた。時は移り、小鳥さへ愛の営みに身をまかす春ともなれば、二人の想ひはいやまして、夫人は夜ごと夜ごとに夫の寝息をうかがつて窓辺に来り、愛のささやきを交した。しかし余りに再三(とし)床の広いことをいぶかつた夫はその理由を詰問した、夫人は、夜なき鶯の美しさの故に、と答へる。夫はその答を冷笑し、一策を案

第二五九號　目次

巻頭言……(2)
マリ・ド・フランス
フランス最古の女流詩人…三木　治(3)
学内報……(6)
校友……(7)
最近見た人聞いた人……T・M・生(8)
五十次方程式……河村信一(11)
志村喬のプロフイル……中井駿二(13)
昭和廿八年度学科目担任表……(14)
カルメラ……橋田慶蔵(20)
学生……(24)
和製スプーナリズム……小野　勇(26)
新着洋書目録抜萃……表紙(四)
編集後記

じて下僕にその鶯を生捕らしめ、「以後わざわざ起きる必要はあるまい」と言ふ。恋の通ひ路を断たれた夫人の涙に激怒した夫は鶯の首をひねり殺し、夫人に投げつけた。夫人は泣く泣くその屍骸を拾ひげ、金で縁取つた錦襴で包み、ひそかに恋人の許に送つて一切を話す。騎士は稔らなかつた恋を嘆じつつ、純金の小函をこらしへさせて、そこに愛の遺品を保存した。（夜鶯）』

『若い騎士ギジュメールはその美貌、武名の故に多くの婦人から慕はれてゐたが、色恋沙汰には見向きもせず、ただ狩猟にのみ快を追つてゐた。或る日、林中で大きな白鹿を見つけ、巧みに矢を射当てたが、あら不思議や、矢は飛び帰つて射手の太腿深く突きささつた。白鹿は仙女だつた。鹿は瀕死の傷に呻きながら、射手に向つて「汝の傷はいかなる草根、医薬も癒し得まい、ただ汝のために世のいかなる恋人よりも苦しむ婦人を汝が得、汝も亦その婦人のために世の常ならぬ恋の苦しみを嘗めるまでは」との呪詛をかける、ギジュメールは従者と離れ、傷にあへぎつつさまよふうちに、海岸に出た。其処に主のない一雙の舟があり、踏入れば善美を尽した寝台が整へてある。彼がその床に伏すや、舟はひとりでに動き出し、やがて或る海岸に漂着した。そこは一人の老騎士が若く美しい夫人にたえず監視の眼を見張りつつ住んでゐるところだつた。たまたま侍女をつれて夫人が海岸を歩いてゐた時、ギジュメールを乗せた舟が流れついた。夫人は舟に入り傷ついた騎士を見出し、同情から自分の部屋にかくまつて傷の手当をした、やがて同情は恋となり、人目をしのぶ恋に二人の身はやかれる。しかし厳しい監視の下には続きうべくもない将来を予期して、夫人は騎士の下着に、騎士は夫人の帯にそれぞれ結び目をこしらへ、この結び目を解き得ない者には誰にも愛を許さない、と約束し合ふ。果して二人は不意を襲はれ、引離されてしまふ。しかしその後起つた様々の苦労にも愛の結び目は誰の手にも抵抗し、最後に再会の日まで彼らの純潔を保護したのであつた。（ギジュメール）』

ではこれらの物語の作者マリ・ド・フランスは一体何者であつたらうか。何しろ彼女自身の証言としては「名前はマリ、フランスのもの」のこの一行であつたに反し、その作品は百年以上も愛読された証拠があり外国にまで飜訳せられ、更に近年ではゲーテまでが「マリ・ド・フランスを神秘的に包む時代の霧が彼女の詩を更に優雅に、更に慕はしく思はせる。」などと書いたものだから、たまらない。マリ・ド・フランス研究が一時流行をなしたほどで、その結果判明した点は、（一）、彼女は英国でその作品を書いたこと、（二）甚だ博学であり、英語のほかに特に当時の女性としては極めて稀な例外をなしてラテン語をさへ知つてゐたこと、（三）、彼女はその「短詩」を氏名不詳の「高貴なる王」に、他の作品をギョームと呼ばれる伯爵に捧げてゐることの三点である、ただし彼女が貴婦人であつたか、侍女であつたか、職業的詩人であつたかは遂にわからなかつた。そこで当然彼女の生活してゐた時代、その環境を知るために、この王と伯爵との猛烈な捜査が始まつた、そして各研究者が殆んど銘々の王と伯爵とを主張し、互ひに他説を抹殺し合つたので、紙上での王と伯爵との大殺戮が展開し、インクの血が滔々と流された。一方また忍耐と細心とに武装した言語学者らは、幸ひ、仏語が十四世紀の前半まではほぼ三十年の間隔をおいて多少とも変化していつた事実を経とし、方言の変化が約二十里をへだてれば極く微量ながらも看取された事実を緯として、この方眼紙にあてて研究した結果、更に次ぎのことも明瞭になつた。（一）、マリはノルマンディの女である。（二）、英国に住んでゐたものの、純粋なノルマンディの方言を使つてゐる。（三）、彼女が作詩したのは十二世紀後半、おそらく一一七五年頃であつた。そして問題の王と伯爵とは、（四）、王とはプランタジュネット家のアンリ二世であること、（五）、伯爵とはギョーム長剣伯であつたことまでわかつたのである。

この貴重な発見によつてマリの出入した宮廷こそ当時最も文運隆盛を極めた宮廷、オヴィディウス、ウエルギリウス、スタディウスを愛好して、小ルネッサンスの現出とまで後人にうたはれてゐる宮廷であることがわかつた。

しかし彼女を包む霧はこれですつかり晴れあがつたわけではない。彼女がその作品の材料を得たと自ら告白してゐるブルトンの伝説とは一体何であるか、その伝説の発祥地は英国であるか、フランスのブルターニュであるか、或ひはそれとも単なる一般的民間伝承をブルトン風に粧ふたものであるか、またそれらが吟遊詩人によつて歌はれたのであるか、語られたのか、英語によつてか、仏語によつてか、などの疑問がつぎつぎに湧き起り、しかもその各説がそれぞれ学名赫々たる戦士を代表者として正邪の決闘をくりひろげたのである。だがここではそれらの論戦の委曲をつくすことを避けて、ただ結論のみを言ふと、マリが蒐集した時のブルトン伝説は粗野な仏語で、吟遊詩人によつて半ば語られ、半ば琴に合せて歌はれてゐたものであり、それらの伝説中にはブルターニュの吟遊詩人によつて提供せられたものも多かつたと同時に、英国の吟遊詩

人でなければ伝へ得ないやうなものも少くないといふことである。要するにマリはこれらの未だ粗朴、幼稚であつた伝説に、完成した嶺を踏んだフランスの形態を与へてそれを文学の域にまで高めたといふことが、出来る。

最後にブルトン物語が文学に斎した新要素としては、一つは超自然物、驚異の世界の導入であり、他は恋愛に関する特異なる観念である。このうち超自然物の導入は必ずしもブルトン物語だけの専売ではなく、これとほぼ同時代の他の文芸作品、即ち古代模倣の物語の功績ででもあるが、恋愛の観念についてはブルトン物語の功績は高く評価されなければならない。

大体、十二世紀の中頃までは「武勲の歌」が殆んど唯一の芸術であつた。しかるにこの作品中に於ける婦人の位置は極めて低く、しばしば単なる肉慾が婦人たちを高名な武人の腕に押しやるのであるが、十二世紀の後半に於て、マリが生活してゐたブランタジュネット家の宮廷に於て、突如として優雅と礼譲のユマニスムの未知の花が咲いたのである。実にこれはその結果の重大さからして注目に値する事実であり、次ぎの如き観念を喚び起した、即ち恋愛こそ社会道徳の源泉であり、人間を高尚にする力を蔵し、求愛者は武勇と礼譲との二つによつて愛する者にふさわしくあらねばならないこと、愛はこの代償としてしか与へられないものであること、約言すれば愛こそ騎士道完成の導師であるべきもの、との観念である。

しかるに恋愛の観念はもともと南フランスの文芸から来たものである、ところが南仏から北仏に伝へられた時には既にこの観念は誇張せられ、恋愛とは一つの技術である、とまでに堕してゐた、吟遊詩人たちはこの技術を更に微細な規則を作つて複雑化し、恋人は婦人の前では永遠の恐怖に於て生きなければならないとか、儀式に通じ、言葉は巧みで詩歌をよくし、婦人の命を受ければ、水火も辞さぬものでなければならぬと言ふ。即ち恋愛は情熱ではなくして、技術であり、儀式である。「武勲の歌」の粗野なる恋愛の反動なのである。そして若しこのまま事態が推移すればフランス中世の詩は、きざな、形式主義の、虚飾のなかに滅びたであらう。そこへブルトン物語の新しい恋愛の観念が生気を吹きこみに来たのである。「武勲の歌」の粗野な、肉慾趣味と、南仏の詩の虚礼とに対して、ブルトン物語は純粋な理想主義を唱へるのである。ここに於ては恋愛は技術ではなく、詩歌や辯舌の錬達をも必要としない、それはもはや或る価の代償として与へられるものではなくなつた。イズーがトリスタンを愛するのは、トリスタンなるが故に愛するのであつて、他の何の功徳によるのでもない、道徳的に価値するとかしないとかはここでは問題ではない。それは単純な、余りに単純な観念かも知れないが、実に真実である。また婦人もここに於ては南仏の詩に於けるが如き無感動な偶像ではなく、情熱の前には男女ともに同権である。規則も、理論もない純粋な愛、これがブルトン物語の長所であり、その大いなる文学上の貢献である。

もちろんかかる強烈な恋愛の描写はラシーヌの筆を以て始めて可能であり、やや単調なマリ・ド・フランスの詩才では未だ遥かに及ばないのであるが、少くともトリスタン物語に見るが如き致命的恋愛の採録者としてのマリの功績は忘るべからざるものがある。

これが男尊女卑の筆者も彼女の前を素通りしかねてゐる理由なのである。

（文学部教授）

學報局だより

もつとニュース性を

常に新鮮なニュースを最も早く、かつ正確に知るということは近代人の本能です。殊に関西大学に関係せられる各位に対し、学内のあらゆるもの、隅々に起つた出来事を或は遠く各地で活躍される校友諸賢の動きを誤りなく迅速に伝えるのは関西大学学報の大きな任務であります。勿論あらゆる手段を講じてその任務を果すべく努力して居りますが、各方面からのニュースを直ちに知ることは困難なようです。読者諸君も関西大学に関係あるニュースは、御手数乍ら学報局えも御一報いたゞきたいものです。ニュースは新鮮なものほど尊いもの、又写真も正確を伝えるという意味では非常に貴重な役割をします。学報へ新らしい息吹を吹込むという意味からも各位の積極的御協力を期待致します。

送り先は

大阪市大淀区長柄中通二の一二

関西大学内

関西大学学報局

尚俳壇、歌壇より投稿御希望がありますが、紙面の許される限り掲載したいと思つています。御投稿下さい。

學内報

ロックフェラー財團 ファーズ氏來學

ロックフェラー財団人文科学部長C・B・ファーズ氏は四月十七日午前十時本学千里山学舎に来訪、宮島理事を始め石浜堀、田中、高橋の諸教授に迎えられ大学ホールに入り約三時間半に亘り懇談午後一時半離学した。

同氏は昨年四月にも来学、今度の来訪は二度目であるが、特に東洋文化関係を中心としたアメリカ各大学との文献資料、或は論文交換の労を取る等同氏の本学に対する功労は大きい。

アメリカでも同じ悩み

大学問題で語る

懇談会の席上宮島理事は日本に於ける私立大学の教育現況と新学制に関する問題について発言、アメリカのシステムによる学制に原因する大学経営の困難性と大学教育のマス・プロ化に対してファーズ氏に意見を求め、我国の国情に即した学制が考えらるべきであると主張したが、ファーズ氏は之について概略次のように述べた。

私立大学の多いアメリカでも常に日本と同様な問題があり、極めて重大な事柄である。アメリカでもこれに対する満足な解答は得て居らず同じ悩みをもっている。私の財団でも研究しているが、残念乍らその極め手はないように思う。日本に於いてアメリカとのシステムに依る教育の結果日本の国情に即しないというのは遺憾であり、充分に検討されねばならないと思う。なお大学経営に関して私の手許に二三の適当な参考資料があるからそれを提供したい。（寫眞はメモを取るファーズ氏）

各種委員会の活動活潑

既に委員会長、副委員長の決定を見た建設委員会及び学事委員会は四月二十日千里山大学ホールに於て第二回集会を開催、前回の千里山学舎改新築計画につき実地調査を行う共に教室その他建築を早急に着手することに決定

又給与厚生委員会は四月八日天六学舎に第一回集会を開催、諸規定改正に伴う給与規定及他の諸規定草案につき久井専務理事より各々説明あり討議に付された。尚委員長等の選任は次回に行われる予定である。

就職旋旋委員会は四月二十七日千里山大学ホールで開催され山田学生部長より二十七年度卒業生就職状況の説明あり、今年度の就職斡旋対策については次回に検討が繰越された。

体育振興委員会は五月二月千里山学舎大学ホールで開催された。

訂正 第二五八号学内報第三段十四行目の学事委員会副委員長には浪江源治氏とあるのは下条小野右衛門氏の誤り、お詫びして訂正致します。

木村健助教授學長事務代行に

岡野学長病気療養につき四月三十日付をもつて木村健助教授が学長事務代行に補せられた。

岡野學長に學位記

本学岡野留次郎学長はかねて学位請求論文「弁証法的存在論序説」を京都大学に提出していたが、この程同大学文学部教授会の審査を経て五月二日付を以て文学博士の学位を授与された。

—◇教授出張◇—

◇杉原四郎教授は四月二、三の両日一橋大学に於いて開催された経済学史学会第七回大会に出席

◇河村宜介教授は四月四日から六日まで横浜国立大学経済学部に於いて開催された日本商品学会第四回総会に出席

◇中谷敬寿 桜田誉両教授は四月二十五、六の両日法政大学に於いて開催された日本公法学会に出席

◇池垣定太郎教授は四月二十五、六の両日中央大学及び明治大学に於いて開催された海法学会、日本私法学会に出席

◇植田重正教授、中義勝専任講師は四月二十五、六の両日中央大学に於いて開催された日本刑法学会に出席

◇明石三郎新授、岩本薈専任講師は四月二十六、七の両日明治大学に於いて開催された日本私法学会に出席

◇末永雅雄教授は四月二十二日より同月二十八日に至る間東京博物館で開催された日本考古学会総会及び明治大学で開催の日本考古学協会総会出席の為出張

入學式擧行

昭和二十八年度入学式を大学院は四月二十四日、学部第一部は四月十五日千里山学舎で夫々挙行、学部第二部及短期大学部は四月十五日、第一高等学校は四月八日、第一中学校は三月三十日夫々天六学舎で挙行された。

人事異動

昭和廿八年四月一日附
田辺清市
木村達雄
岡橋祐
上島喜三
内藤政雄
溝口一雄
山口吉兵衛
川元英二

昭和廿八年度本学講師を委嘱する（各通）

昭和廿八年四月二十三日附
栗駒正和
荒木泰
ジャディ・ルビイ

昭和廿八年度本学講師を委嘱する（各通）

昭和二十八年五月一日附
山本彌一郎
里井宥二良

昭和廿八年度本学講師を委嘱する（各通）

昭和廿八年四月三十日附
教授　木村健助

学長事務代行に補する

昭和廿八年五月一日附
堀堅士

本大学専任講師に任する

昭和廿八年五月一日附
降旗武彦
園田理一

昭和廿八年度
本大学講師を委嘱する（各通）

昭和廿八年四月一日附
中小路泰夫

関西大学第一高等学校教諭に任する

昭和廿八年四月一日附
浜口誠也

関西大学第一高等学校専任講師に任する

昭和廿八年四月一日附
教諭　第一中学校　三島律夫

関西大学第一中学校長を命する

昭和廿八年四月一日附
第一高等学校長
兼第一中学校長　矢口家治

兼務を解く

昭和廿八年四月一日附
中野真作

関西大学第一中学校教諭に任する

昭和廿八年四月一日附
渡辺加多二

関西大学第一高等学校専任講師に任する

昭和廿八年四月十六日附
小畑与治郎

関西大学第一高等学校講師を嘱託する

昭和廿八年四月九日附
関西大学第一中学校教諭
青山兼祐

願に依り職を解く

校友

千里山昭八会開催

四月二十六日午後五時半より道頓堀「千里」に於て昭八会委員会を開催、幹事より四月十二日開催の二十周年記念行事第一号の謝恩祝賀会に関する諸事報告をなし、全員の了承を得、更に今後の行事について衆議懇談の結果左の通り確認決定した。

○母校への記念品は五月中旬に代表が母校訪問の上にて贈呈する

○植樹の件は記念品贈呈の当日理事者と懇談の中決める

○昭八会校友物故者の慰霊祭は十月下旬に執行する

記念行事に関してはこれを以て終了し、次でこれは記念行事とは関係ないが、我等の恩師である矢口、堀、中谷、森川諸先生が今回母校より研究の為欧米各国に赴かれることはなつたことは、母校将来発展のためにも誠に喜ばしく、吾々は茲に恩師の行を壮にし、且つ一路平安をお祈りする意味に於て、五月下旬に恩師に御来席を願つて例会をも兼ねて一夕清談を交わす機会を作ることに決定した。

議事終了後一同打寛いで坪田先輩も交えて共に鍋をつゝきつゝ千里山学園創業当時のエピソード等興味深き話を聞き大いに歓を尽し午後九時散会。（平井三朗氏報）

当時の出席者左の通り

先輩　坪田五一

浦野健二郎、大島武夫、野田文雄、中家利国、美吉克之祐、木下忠夫、多賀恒一、宮脇慎三郎、中江巽、平井三朗

（順不同、敬称略）

衆・参両院へ校友七氏

四月に施行された衆議院議員総選挙及び参議院議員通常選挙において全国各地に校友多数が敢闘左の七氏が当選の栄冠を獲得した。

衆議院

大上　司（自）兵庫四区
押谷　富三（自）大阪二区
小林　絹治（自）兵庫二区
田中　久雄（改）三重三区
福田　繁芳（改）香川二区
山本　勝市（分自）埼玉四区

参議院

森下　政一（社右）地方　大阪区

元福岡支部長　池田氏表彰さる

福岡弁護士会所属、弁護士池田重吉氏（明治二十四年第三回法卒）は弁護士在職五十年以上者の一人として五月三十日東京に於いて日本弁護士連合会より表彰されることになつた。

因みに同氏は校友会福岡支部長として三十年の長きに亘り校友会事業に尽力されその功績は大きいものがある。

住所　福岡市地行西町一八

海外彙報

最近会つた人聞いた人

―在外知友素描―

昨年夏以来久し振りに海外彙報に筆を執つて一考再考、最近会い又通信して得た海外の知人の消息を気のおもむくまゝ記してみよう。

一、J・M・クラーク(J.M. Clark)

コロンビア大学のクラーク教授から来た最近の便りでは、相変ず家庭中心の彼は自分の妻と二人の息子の事にその紙面の大半を費して居り、殊に息子の研究の近況を詳細に書き、子供の教育に深い理解と関心をもつて色々と面倒を見ている様子は、非常に楽しそうでもあり又美しい事である。彼自身は昨年末大学は停年になつたが、しかし尚二年間正教授の地位に留まることを許されたという一節があつた、恐らく留まることを要請されたのであろう。

殊に感じたのは彼は熱心に書き続けていることである。経済思想史の大家としての彼の父J・B・クラークにならい経済思想史及び理論の研究に力を注いでいるが、最近「経済思想の発展」(Development of Economic Thought)と「経済生活の目的」(Goals of Economic Life)の二つの著作を発表したいという。不幸にしてそれらを入手していないので内容を紹介し得ないのは遺憾である。彼は〃私のタイプライターは常に動く〃と便りにあつた。外国では珍らしくない事ではあろうが、停年になつて尚研究を止めず著述さえしていることは正に範とするに足るところであり、吾人私かに省て内心忸怩たるものがある。学究の徒須くかくありたいものである。(本誌二四四号参照)

二、エドマンド・C・ブランデン(E.C.Blanden)

彼とは屢々通信を交換するが、彼は頗る筆まめである。勿論彼は世界的詩人なりといえども我々の通信が詩歌でというわけにはゆかないが、最近の手紙の中に一節の政治論があつた。それは一昨年のイギリス総選挙について筆を起し議会政治の問題にふれ、将来の英国政治の傾向を述べたものであつた。彼はその間に、従来ウエストミンスター(英国議会のある所換言すれば英国政界)に現れた英国の政治家は数が多い、だが将来のウエストミンスターを担う大物は果して誰であろうか、近頃世上で呼び声が高いのはベヴアン(A.Bevan:労仂党左派)である。果して世評通りベヴアンが大物であり、大政治家であり得るかどうかお互いに洋の東西で見守ろうではないか、というのである。この言葉が何を意味するのか聊か解しかねるが、英国の将来がブランデンの云う如き、ベヴアンの出現によつて如何に展開されるのか興味ある問題であろう。何れにしろ彼からの手紙としては仲々考えさせられるものであつた。

三、アルフレッド・コルトー(A. Cortot)

昨年九月から約三ケ月滞在した彼を世界一流のピアニストとは知つていたもの丶初めは単に大芸能人として見るに止まつていたのは私の無知の故であつたかも知れない。所が彼に二度三度と会つて彼の種々な面に触れ深い感銘を覚えた。ことはかつて本誌にも書いたが、彼は非常にヒューマンであることは勿論詩人であり哲人でありその道に於ける偉大な学者でもある。私が彼に滞日中の所感を求めた時日本の景色は美しい、Paysage humain であると語つた。一寸その場で意味が判りかねたが後日再度訪問して本学外苑の桜の写真を見せた際彼は桜の写真を見て何も云わぬ先に〃この木を切つてはいけない〃とはげしく叫ぶ様に云つた。彼の云わんとするところは自然を愛せよということであり、自然を徒らに機械主義によつて破壊せず自然の自然な姿において人間との調和を見出す美しさという意味がかの言葉となつたのであろう、私はこう解釈してすぐいつた。あなたは日本の景色をほめたが、そこに住む人々はヒューマンだろうか?彼は両手をひろげ一寸肩をすぼめ微笑したが果してその笑いは何を意味するだろう。

コルトー氏の微顔
(ミヤコ・ホテルにて寫す)

彼は雅楽を聞いたといつてしきりにその幻想的な優美さと楽の音色を歎賞していた。日本にもあれだけのものがあるのに何故その研究に力を注がないのか、又日本人の演ずる西洋の音楽はイミテーションである、テクニックのみがあつてエスプリがない、老大家にしてはじめてこの言痛烈な批評は正に頂門の一針である。関西滞在中大学課

程に音楽教育を採り入れたいというがという質問に彼は数頁に亘つてこまごまと自らの経験から得た意見を書いて私の手許に届けてくれたのはわれわれに対する最もよき贈物であろう。その中には彼の哲学が歴然とうかがわれ非常に貴重なものである何れ又これを紹介する日もあろう。本誌二五二号参照

四、ジョルジュ・デュアメル(Georges Duhamel) 同氏は丁度コルトーと期を同じくして来日、帰路はコルトーと同じ船であつた。彼はアカデミー・フランセーズ (Académie Française) の会員で「パスキエ家の記録」の著者としてわが国でも知る人が多い。来訪中本学にも来講を約したが、彼自身の健康の都合で実現せず遺憾であつた。折角の来日中健康が勝れずその活動が阻まれ各地で行つた講演「文明について」も不評と云われたのは気の毒であつた。しかし彼が遠路仏国から来た成果は充分に達せられている事は帰国後の訪日記によつても明らかである。

彼の訪日紀行文がパリーの新聞に掲載された、勿論一般に海外旅行者の例外なく書くものではあるが、詩人である彼にして日本の人口問題、産業乃至は輸出入の分野にまでふれていることは珍らしいことゝ云わねばならない。特にその結論には彼一流の面目躍如たるものがあつて面白い。「今日の日本は英語が非常に盛んに使われている、フランス語は全然ないわけではないがそれ以上にフランス文学或はその文化の研究に対して殊に青年層が熱心である。フランス政府はこの際積極的にこうしたものを通じてすべての点で日本と接近せよ、日本を友邦として迎えるのはこの機を逸して永久に来ないであろう」と強い筆で書いている。このデュアメルの紀行文についてパリー在住の日本人の好意のないとかくの批判があるが私はそう思わない、約二ケ月の彼の観察からあれほどのことがと思う程の日本批判は鋭敏であり痛烈である。大綱は誤らず伝えられて居り、一概に非難するのは当らない、因みに彼の紀行文は今年の二月九日から七回に亘つて仏紙フィガロ (Le Figaro) に連載されている、一読されよ。

在日中彼の活躍もさることながら、ブランシェト・デュアメル夫人の態度も素晴らしかつた。一夜彼の歓迎会に於ける夫人のレスタシオンは正に当夜の圧巻であり、その十分間はパリーの劇場にいる気がした。それもその筈これには深いわけがある。デュアメルは青年時代に数人の有志と計つてアベー (Abbaye: 僧院の意) という文学研究グループを作つた、その中からは後述のジュール・ロマンやヴィルドラックらが輩出したが夫人はこのヴィルドラックの妹でありジャック・コッポー (Jacqeus Copeau) らと共にグループの専属劇場である「古い鳩の家」(Vieux Colombier) 座に出演していた程の人でこの素晴らしさは偶然なことではない。

在阪中文楽を見せようと色々骨を折つたが、紀行文中にも最大の遺憾の一つであると書いてあり、私も又機会あれば彼に是非重要文化財としての文楽を見せたいも念願している。

五、ジュール・ロマン (Jules Romains) デュアメルの同志として活躍し、アカデミー・フランセーズのメンバーであり、著書なども非常に多い。特に二十七巻にも及ぶ「善意の人々」(Les Hommes de Bonne Volonté) は特筆さるべきものである。私は彼と個人的に面識はないが、アカデミー・フランセーズに於ける彼の前任者ボナールは知つていたのでその後任としての彼に何らかを期待していた。先頃彼が横浜へ来たことを知つたが、滞在期間が余りに短かく、面会の機を得なかつたのは残念である。彼はユナニミスム (Unanimisms) 即ち一体主義を主張した、この主義は我が国では特に見当らないが、個人と団体は一つであり、その一致が神であるといゝ、又都市の騒音の中にもハーモニーを見ると説き是を実行したことは彼の思想特徴の一つである。ラジオを通じて最近彼の放送を聞いたが、好感のもてる話振りで、彼は私の是非会いたい人の一人でもある。

六、アンドレ・フランソワ・ポンセ (André François-Poncet) 彼と相知つたのは一九二八年パリーで私と彼の共通の友人であるランドリー宅であつたが、多忙な彼とはそれ以来かれこれ非常に疎遠であつたが、ゲーテ研究で知られる学者であり同時に外交官としても有名な彼の一挙手一投足は常に新聞紙上で知つていた。現在駐独最高弁務官の要職にあるが、最近故ベタン元帥の後任としてアカデミー・フランセーズのメンバーに加わつたことを知り祝文も兼ねて久濶の情を述べた。彼からの返事にはその冒頭に私の親感や友人その他世界の多くの国から祝文を頂いたが、日本から祝文を頂こうとは夢にも思わなかつたし、それだけに懐しさも一入であると謝意を述べ更に続

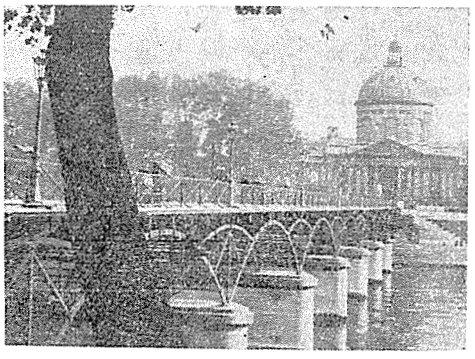
けて私は期せずして再びドイツに重任を奉ずることとなり半世紀来私の心痛事であつた独仏間にわだかまる諸問題に身をもつて当らねばならなくなつたとは何たる因果であろうか。国家も個人と同じ様に過去の経緯偏見を有して居り遽かに之から脱することは困難である、だが私は失望しない、両国間の融和について一つの曙光を認め遂にはヨーロッパが一体となるという様な事が実現しない限りでもないと彼の苦衷と期待を交々述べている。思うに最近再びもり上つたヨーロッパ統合論が遅々乍ら実現に歩を進めて居り、既に共通の憲法の草案も最近出来上つたという、彼はこの辺に賛成しその実現を希求している様である。

彼がアカデミー・フランセーズのメンバーに加わつた際の二時間に亘るレセプション・スピーチの全文がル・モンド紙に紹介されてあつた。慣例に従つて、前任者ベタン元帥の事蹟について述べているが、元帥を政治的立場から少しも扱つていないのは不審であつた。私は彼への祝文の中にベタンにしろド・ゴールにしろ或る意味でフランスを救つた人であると思う、これらの人に対する態度が聊か理解に苦しむという質問を呈したが、長い返事にそれについては何一つの意見も見当らなかつた。勿論その理由は判る。かつて政府の政策を論難したり、時の権力者に濫媚を呈してその入会が取消された例もあつて彼の当惑したであろう事は想像に難くない。とかく混沌たる国際政治界に於ける彼の立場は同情するものがある。

七、ダリユス・ミヨー(Darius Milhaud)最近の通信中に「近く日本で久しぶりに逢えるであろう」という一節があつた、彼は第二次大戦中夫人と共にアメリカに渡りオークランドのミルズ大学(Mills College)その他で音楽を教え時々パリにも帰ると云うことである。本誌二五一第号(海外彙報)の欄でも一寸紹介しておいたが二十有余年前にはモダン過ぎるとし一般に受けなかつた彼も最近は楽壇の大物となり我国にもその名が高い、姓の発音はミローでなくミヨーだと警告を発したがやはりミローと云つて居るようである来日したら本人に直接聞くがよい。

八、レオン・ジユオー(Leon Jouhaux)ある新聞社の招きによつて近く来日すると伝えられる彼とは私が国際労仏機関に関係をもつた数年間立場は異にしていたが絶えず交渉があつた。彼は現在新仏国労仏総同盟(Confédération Générele du Travail=C.G.T.-Force Ouvrière)の会長、経済審議会(Conseil National Economique)会長等の要職に任る。彼の振出しは労仏者であるが幼にして聰明、労仏の傍ら勉学、当時よりすでに労仏運動に異常の関心を持ち一九〇六年C・G・T・に関係した。彼の熱誠と非凡な才幹とは群をぬき一九〇九年早くもC・G・T・の書記長となり仏国労仏運動の代表的闘士となつた。第一次大戦の終るや平和条約中の労仏憲章起草に参加し国際労仏機関創設と共に仏国労仏代表として、又一九三六年フランス中央銀行定款変更に際し同行顧問としてこれに参画する等その活躍は目覚しいものがあつた。一九四一年ヴィシー政府に依つて捕えられ終にドイツ官憲に引渡され帰仏したのは一九四五年であつた。彼はその後容共に傾いたC・G・T・と袂別、一九四七年同志と謀り新労仏総同盟を結成してその会長となり今日に至つている。彼の雄弁は有名であり来日を機に久し振りにそれが聞かれるのは楽しみである。

以上デュアメル、ジュール・ロマン、フラソア・ポンセ等仏国アカデミー・フランセーズ(Académie Francaise)会員のことを述べたついでにアカデミー・フランセーズについて一言する。これは以前我国で仏国翰林院と訳され、近頃は学士院とも云われるようであるが旧訳の方がよいように思う。というのはこの機関はアンスティチュ・ド・フランス(Institut de France)の一部でありアンスティチュを通常学士院と訳されるから学士院の中に学士院があることになるからである。尤もこんなものは強いて邦訳の必要もあるまい。



そもそもアカデミー・フランセーズは一六三〇年頃有志に依つて組織された一小学会がその濫觴である。一六三四年仏国文化中興の祖リシュリュー

に依つてその内容が整備され翌一六三五年ルイ十三世に依りアカデミーとして法的に承認された、その後一時革命の為に廃止されたが、一七九五年憲法に依つてアンスティチュ・ド・フランスが設立せらるゝやその中に、他のアカデミーと共に復活包含された、爾来幾多の変遷を経、殊に一八一六年及び一八三二年の勅令に依り著しく改編を見、今日に至つたものである。その任務は国語の整理、辞書の発行、学術奨励の為の授賞等々がその主要なるものであつて辞書は一六九四年に初版が、一九三二年—五年に第八版が発行された。アカデミー・フランセーズはアンスティチュ・ド・フランスの中でも最も権威ある部門として重きをなしている、その会員は四十人で終身であり、この会員たることはフランス人にとつて最高の名誉とされて居る。尚アンスティチュ・ド・フランスはアカデミー・フランセーズの他（Académie des Inscriptions et Belles Lettres,（一六六三年コルベールにより創設）Académie des Sciences,（一六六六年コルベールによる）Académie des Beaux-Arts,（一七九五年マザラン及びコルベールによる）Académie des Sciences Morales et Politiques（一八三二年）の四アカデミーよりなる。旧師シャルル・ジイドは「私は諸外国のアカデミー会員に挙げられているが自国アンスティチュの会員ではありませんよ」と皮肉を飜ばしていた。

アンスティチュ・ド・フランスを形成する五種のアカデミー中 Académie des Sciences Morales et Politiques は最も新らしく、一八三二年につけ加へられたものであり従つて一九三三年にその百年祭が行われた。当時恰もパリに在住した私はその紀念式典に招かれ諸種の行事を親しく見ることが出来たのはよき思出である。又これと同じようにその前年即ち一九三一年に行われはフランス自由大学（Collège de France 本誌第二三四号参照）創立四百年祭にも際会することを得たがかれこれ遠国の一学徒にとつて天与の好機であつたと云わねばならぬ。

（写眞はセーヌ河右岸より見たフランス學士院と藝術橋（ポン・デ・ザール））

（T・M・生）

五十次方程式

河村信一

関孝和（1642—1708）、建部賢弘（1664—1739）等徳川時代の数学者の研究中最も力を尽したのは円理であると云はれて居る。即ち円ことに円周率に関するもので、終局の目的は円周率の詳しい数値を求めることにあつた。其の方法としては大体角術に基くものと、綴術に基くものとの二つに分けられる。角術とは正多角形の辺の大きさと其の内接円及外接円の半径等との関係を求め、其の辺数を増して成るべく多くした時の全周の極限値を求める方法であり、綴術とは今の語で云へば無恨級数であつて、各種の方面からの研究に依つて種々の級数を求めて居る中には西洋に先つて日本で得られた公式もある位である。

今日の数学から云へば甲の方法は三角函数を使へば簡単に公式が得られ、之に依て正三角形、正四角形と正何角形でも其一辺が計算出来るわけである。が之れは公式だけの話で実際の計算となると三角函数表（又は其対数表）の御やつかいにならなくてはならない、即各辺に対する中心角の半分の正弦を使はなくてはならないが、其角が都合のよい値である時は良しいが、一般にはそうでない。そうすると表を用いての計算の結果は其表の精度の範囲だけの信頼に止まるから、たちひ七桁の表を用いても結果に於ては小数点下六位までが、やつと信頼出来る、其以下は全然問題にならない。さればと云つて三角函数のもつと詳しいものを手に入れる事も一寸出来難いし（文献を見ると J. Peters（Berlin, 1911）の二十一桁や H. Anodyer（Paris, 1915）の十五桁の表などもある）が新らしく計算するとなつては、それこそ一朝一夕にやれるものでは無い。するとどうすべきか。乙の綴術の方法は勿論一段の進歩ではあるが之も其無限級数の実際計算と云ふやつかい物がある。然し徳川時代の実に華々しい収獲は驚くべきもので西洋数学に少しも引けを取つて居らないと云へる。此れ等に関しては今は略して前の角術にも一度戻つて考へる事にする。

角術に於ては正多角形の辺と其内接円、外接円の半径などとの間の関係を求めるに際し、三角函数には触れ無いでやらうと云うのである。三角函数を濫用（と云つてはわるいが）の今日折角の利器を用い無いでこの問題をやらうと云うのは、一寸時代ばなれしているかも知れ無いが、正多角形の辺数が、或る特別な数の時は中等学校でもやつて居る。例へば

正三角形の業合は一辺は$\sqrt{3}r$（rは外接円半径）、以下同、同じく正四角形では$\sqrt{2}r$、或は正六角形ではrである事などは良く知られて居るが、然れば其の正多角形ではどうか。之を考へたのが徳川時代の角術の中の一部分であつて、種を明かすと、方程式を作り其の解法に因て結果を得ようとするわけである。こんな事を云つてると本来の目的の円理に進むには中々前途遠遠の感があるが、まア夏の日永に寄り道をしてもらう心で辺の数が三、四、五、六、……とだんだん増して行つた時の解決をする事としよう、勿論前途を急くと云ふなら、順にやらずに、四、八、十六……と倍ましの辺の多角形のみについて計算して行く方法もある。関の遺稿括要管法には2の17乗即ち131072角形の周を計算して居るから、其の方面から考えても一寸無骸骨の様な気がするが、兎に角脱線気味を許してもらつて、何角形の場合にも此数方程式に依て其辺の長さを求められるかどうかを調べてみよう。若し之が出来たら其辺の数を多くする事に依て其根に辺数を掛けたら円周率を与へる事になるのである。

以下先人の研究に基いて之を現在の数学式に書き直して説明しよう。その基礎となる公式としてはいろいろ発見されたのであるが、最も使用して都合のよいのは次の公式である。

$$a_2^2-a_1^2=a_3a_1 \qquad (1)$$

このa₁は云うのは半径1の円に内接する正多角形（辺の数はいくつでも良しい）の一辺の長さa_2は頂点1つとびの対角線の長さ、a_3は連続頂点の二つとびの対角線の長さ……である。此の公式の証明は今は省略するが、同し様な公式

$$a_3^2-a_1^2=a_4a_2,\quad a_3^2-a_2^2=a_3a_1\ \cdots$$

などがある。又a_1とa_2との関係としては

$$a_2^2=a_1^2(4-a_1^2) \qquad (2)$$

がある。之に因て前式（1）から

$$a_1^2(4-a_1^2)-a_1^2=a_3a_1$$

即ち

$$a_3=a_1(3-a_1^2) \qquad (3)$$

が得られる。此の方法をつゞけて行くとa^4、a_5、a_6……も皆a_1で表はされる。（以下では簡単に$a_1^2=\alpha_1, a_2^2=\alpha_2$……と書く事にする。）

$\alpha_1\alpha_2\alpha_3$……の関係は辺の数に関係が無いから前公式は何角の場合にも用いられる。例へば正四角形ABCDの時はAB, BC, CD, DAは共にa_1 AC, BD, はa_2となるが扨a_3に相等するものが無い。然し辺DAはAB BC CDの三辺のと端を端つないだものと考へるとa_3とも云へる。依て此時は$a_3=a_1$となり前式から$a_1=a_1(3-a_1^2)$即ち$3-a_1^2=1$, $a_1^2=2$, $a_1=\sqrt{2}$となる。又AB, BC, CD, DAの四辺の端と端とが、つながつて居るからa_4は0であると見る。a_4は次の方法で求められる。

$$a_3^2-a_1^2=a_4a_2,\quad \alpha(3-\alpha)^2-\alpha=a_4\sqrt{\alpha(4-\alpha)}$$

$$\alpha^2(8-6\alpha+\alpha^2)^2=a_4^2\alpha(4-\alpha)$$

$$a_2^4=\alpha\frac{(2-\alpha)^2(4-\alpha)^2}{4-\alpha}$$

$$=\alpha(2-\alpha)^2(4-\alpha)=0 \qquad (4)$$

之から$a_4=0$とすると$\alpha=2$又は$\alpha=4$或は$a_1=\sqrt{2}$又は$a_1=2$となる。後の方の答は不適であるから前の方が真答となる。以上の二法の内$a_3=a_1$よりも$a_4=0$の方が多く用いられる。

戻つて正三角の時は$a_3=0$即$a_1=3$となる。此の様な方法を繰り返して用ふと、何角形の場合でもa_1を求める方程式が出来る。但し前のa^4の様に因数分解が出来ればよいが、そうならない時は高次方程式を解く事となつて、其面倒である。然し徳川時代の学者は特別の研究による方法で相当高次の方程式でも解いて居たのは感心すべきである。尚今一つ正五角形の場合を云ふと、最後の方程式として

$$25\alpha-50\alpha^2+35\alpha^3-10\alpha^4+\alpha^5=0$$

即ち

$$\alpha(5-5\alpha+\alpha^2)^2=0 \qquad (5)$$

を得、之れから$\alpha=\frac{1}{2}(5-\sqrt{5})$依て

$$a_1=1,1755705$$

が得られる。又正六角形の場合には

$$36\alpha-105\alpha^2+112\alpha^3-54\alpha^4+12\alpha^5$$

$$-\alpha^6=0$$

即ち

$$\alpha(4-\alpha)(3-\alpha)^2(1-\alpha)^2=0 \qquad (6)$$

を得、之れから$a_1=1$, $\sqrt{3}$, 2の答を得るが、此の内$a_1=1$だけが真の答である事は直ちにわかる。此の様にして何角でも出来るが徳川時代の発表は最大三十角位までであつた。負けるものかと暇々に計算をつづけて正五十角形の一辺を与へる方程式まで漕きつけて兎に角方程式は作つたが、其解は之れからの仕事に残してある。うまい工合に因数分解出来るものは都合が良しいが中々そうは行かない。そこで本文の表題の五十次方程式を書く順序となる、全部書くのも心無い事と思ふから式の始めの方と終りの方だけ書いて置く。

$$2500\alpha-520625\alpha^2+43316000\alpha^3-\cdots$$

$$\cdots-4850\alpha^{48}+100^{49}-\alpha^{50}=0 \qquad (7)$$

因数分解をすると

$$\alpha(4-\alpha)(1-3\alpha+\alpha^2)^2(5-5\alpha$$

$$+\alpha^2)^2(1-75\alpha+775\alpha^2-\cdots$$

$$\cdots+\alpha^{10})^2(5-125\alpha+\cdots\cdots+\alpha^{10})^2$$

$$=0 \qquad (8)$$

となる。然しこの十次方程式を解く事は中々一筋縄では出来ないから、こゝらで一寸一休みする事にしよう。

（短大教授）

☆　☆　☆

☆　☆　☆

☆　☆　☆

推薦校友

志村喬のプロフィル

中井駿二

一昨秋、文部省での会議の為上京した時、雨の中を志村君は三船敏郎の車を駆つて会場まで迎えに来てくれた。戦時中からかけ違つて会つていなかつたので、実に久し振りの邂逅だつた。十年前とちつとも変つていないじやないかという、彼の不満そうな第一声だつたが、そういう彼も変つていなかつた。変つていないと思うのは、時々画面で彼を見ていたせいもあるかも知れないが、そもそも彼が演劇に志した時から老け役が得意だつたので、そのイメージが変らないからだろう。たゞ髪の毛が見事な白さ、といつても老髪のそれではなく、一種の亜麻色の光沢をもつた、独得の色に変つているのが目立つだけだつた。

当時彼が出演した「羅生門」が国際映画大賞を受けたあとだつたので、何処を歩いても志村だ志村だという声が聞え、お茶を飲みにはいると、忽ちサイン・ブツクが集つて来た。それでも彼には別に変つたポーズもなく、依然として低い声でゆつくりと話し、バーバリを着て鳥打をかぶつた姿は、昔の新劇時代そのまゝだつた。

彼との交友は実に古い。初めて会つたのは、彼が本学専門部の学生で、市役所の水道部に勤めて居り、私が早稲田仏文の学生になつたばかりの時だから、もう二十八、九年になる。亡くなつた本学講師で劇作家の豊岡佐一郎氏を中心に、新劇團七月座を結成した頃からで、当時は殆んど毎日のやうに会つていた。私は主として演出を勉強していたのだが、時々彼と一緒に俳優として共演したことがある。中でもジユウル・ロマンの「アメデと靴磨盞上の紳士諸君」をやつた時は面白かつた。ユナニミスムの芝居を日本で初めてやるというので私達は大いに得意で、扮装や装置にも凝つたものだつた。彼は老紳士を演じたのだが、八十才位のメーキャップで、後年老け役を得意とする様になつた彼も、未だあの時以上に老けたことはないのではないかと思う。

四、五年その劇團で公演や放送をやりながら、つき合つていたのだつたが、私は東京での研究や仕事が忙しくなり、劇團も大阪協同劇團に転換した頃、彼は専門俳優として立つべく、商業劇團には入つた。

彼の演技力の確さは、現在のその地位が物語つているわけだし、七月座時代から注目されていたのだが、それでも商業劇團時代には、役柄の関係で随分苦労した様である。時々大阪に帰省していた私は、彼を道頓堀の劇場の楽屋に訪ね、またその舞臺もよく見たものだが、何しろ泣かせたり、切つて見せたりすることが主眼の商業劇場では、彼の存在は淡すぎて派手立たなかつた。しかしその頃の忍苦と信練とが、後の志村喬を造り上げるのに、大いに役立つていることは争えない。数多い映画俳優の中でも、素人出の人達と比べて彼がずば抜けてセリフのうまいのも、そうした経験がものを云つているのだと思う。しかし根がインテリーの彼は、雑駁な楽屋の空気には馴染めなかつた様だ。二十年も前の劇場では、まだ封建的な匂が強く、楽屋の慣習もわずらわしいものだつた。鏡臺の前で出番を待ち乍ら、例の低いゆつくりとした口調で語る彼の言葉の端し端しにも、智識俳優としての淋しさが滲み出ていた。

その後間もなく私は東京で大学の教壇に立つやうになり、彼も巡業の旅に出たりなどして、次第に会う機会が少なくなつた。だから彼が映画へ転向した頃の詳しい事情は私は知らない。

偶然大阪で会つた時、彼が出演した映画「赤西蠣太」について、眼を輝かせて昂然と語るのを聞いて私は嬉しかつた。その映画は日本映画史の中でも一つの場所を占めるものとなつたが、その頃から彼の進むべき方向が確立した様だつた。彼は私が書いたいろいろなものゝ熱心な且つ有力な読者だつたが、嘗てのドイツの名優エミイル・ヤニングスを論じた私の文章について語つた時、ヤニングスの境地を目指す深い決意の見られたのを私は覚えている。

映画がトーキーとなつてからの彼の進境は目覚しかつた。演劇で鍛えた彼のセリフと動作は、トーキー時代に入つてその偉力を発揮し出した。戦後世評の高かつた「野良犬」を見て、私は暗い客席の一隅から、彼の健在を心から喜んだ。それ以後の彼の活躍は普く世間に知られている通りである。近作の「生きる」においては主演者として、宿望の日本のヤニングスたることの一端を果し得て、恐らく快心の笑をもらしたことであろう。

いま日本の代表的映画俳優となつてからでも、彼の生活態度は極めて謙虚である。俳優として社会的な感を買う様なことは努めて避け、狭い家につゝましやかに住み、古美術を楽しみ、いゝ映画を造ることだけに情熱の全部を注ぎ込んでいる。

（文学部教授）

昭和二十八年度

学科目担任表

（昭和二十八年五月一日現在）

註、学部学科目中傍線は一般教育科目及び補助科目（語学）を示す

大学院

博士課程

法學研究科

公法學專攻

第一類

憲法学特殊講義（演習）　教授　中谷　敬寿
行政法学特殊講義（演習）　教授　渡辺宗太郎
国法学特殊講義（演習）　教授　渡辺宗太郎
国際法学特殊講義（演習）　教授　川上　敬逸
刑法学特殊講義（演習）　教授　植田　重正

第二類

法理学基本問題（講義）　教授　恒藤　恭
世界法史学（講義）　講師　田中　周友
刑事法特殊（講義）　教授　滝川　幸辰
政治学特殊（講義）　教授　岩崎　卯一
政治史特殊（講義）　教授　池田　栄

文學研究科

国文學專攻

第一類

上古及中古文学（一）（講義演習）　教授　沢潟　久孝
上古及中古文学（二）（講義演習）　教授　島田　退蔵
近古及近世文学（一）（講義演習）　教授　飯田　正一
近古及近世文学（二）（講義演習）　教授　金子又兵衛

第二類

国語学特殊研究（講義）　講師　池上　禎造
国文学特殊研究（一）（講義）　教授　小島　吉雄
国文学特殊研究（二）（講義）　講師　山脇　毅
支那文学特殊研究（講義）　教授　高橋　盛孝

哲學專攻

第一類

哲学根本問題（講義演習）　教授　岡野留次郎
哲学特殊問題（一）（講義演習）　教授　大小島真二
哲学特殊問題（二）（講義演習）　教授　田中　熙

第二類

西洋古代哲学原典研究（演習）　講師　田中美知太郎
西洋中世哲学原典研究（演習）　講師　服部英次郎
西洋近世哲学原典研究（演習）　講師　樋元　和一
社会学特殊研究（講義）　教授　岩崎　卯一
支那哲学特殊研究（講義）　教授　石浜純太郎

經濟學研究科

金融經濟・經濟史專攻

第一類

金融理論特殊研究（講義演習）　教授　森川　太郎
証券経済論特殊研究（講義演習）　教授　今西庄次郎
信託経済論特殊研究（講義演習）　教授　板橋　菊松
景気変動論特殊研究（講義演習）　教授　中川庸太郎
経済学史特殊研究（講義演習）　教授　三谷　友吉
西洋経済史特殊研究（講義演習）　教授　矢口孝次郎
日本経済史特殊研究（講義演習）　教授　鋳方　貞亮

第二類

理論経済学特殊研究（一）（講義）　講師　高田　保馬
理論経済学特殊研究（二）（講義）　講師　堀　経夫
経済政策特殊研究（講義）　講師　谷口　吉彦
財政学特殊研究（講義）　講師　中川与之助
貨幣論特殊研究（講義）　講師　正井　敬次
日本経済史特殊研究（講義）　講師　堀江　保蔵
ドイツ経済史特殊研究（講義）　講師　宮下　孝吉
フランス経済史特殊研究（講義）　講師　宮本　又次

修士課程

法學研究科

公法專攻（甲類）

憲法学研究（講義演習）　教授　中谷　敬寿
行政法学研究（講義演習）　教授　渡辺宗太郎
刑法学研究（講義）　教授　滝川　幸辰
刑法学研究（演習）　教授　植田　重正
国際法学研究（一）（講義演習）　教授　川上　敬逸
政治学研究（講義演習）　教授　岩崎　卯一
政治史研究（講義演習）　教授　池田　栄

私法專攻（乙類）

民法学研究（一）（講義演習）　教授　福島　四郎
民法学研究（二）（講義演習）　教授　本村　健助
民法学研究（三）（講義演習）　教授　明石　三郎
商法学研究（講義演習）　教授　西本　寛一

（丙類）

国際法学研究（二）（講義）　教授　恒藤　恭
法制史研究（講義）　講師　猪熊　兼繁
英米法研究（講義）　教授　大阪谷公雄

文學研究科

（甲類）

英文學專攻

英語学及英米文学研究　演習　教授　堀　正人
英語学及英米文学研究　演習　教授　山田松太郎
英語学及英米文学研究　講義演習　講師　山本　忠雄
英語学及英米文学研究　講義　教授　石田　憲次
英語学及英米文学研究　講義　教授　中西信太郎

国文學專攻

国語及国文学研究　講義演習　教授　沢瀉　久孝
国語及国文学研究　演習　教授　飯田　正一
国語及国文学研究　演習　教授　金子又兵衛
国語及国文学研究　演習　教授　吉永　登
国語及国文学研究　講義　教授　小島　吉雄

哲學專攻

哲学及哲学史研究　講義演習　教授　岡野留次郎
哲学及哲学史研究　講義　教授　田中　熙
哲学及哲学史研究　演習　教授　大小島真二

（乙類）

歴史学研究〔国史　講義　講師　魚澄惣五郎
東洋史　講義　教授　石濱純太郎
西洋史　講義　教授　渡辺　格司
大陸文学研究　講義　教授　高橋　盛孝
支那文学研究　講義　講師　山本　忠雄
英語学研究　講義　講師　岩倉　具実
古典語研究（一）　講義　講師　岩倉　具実
古典語研究（二）　講義　教授　堀　正人
比較文学研究

美術及美術史研究　講義　講師　辻部政太郎
支那哲学研究　講義　教授　壺井　義正
考古学研究　講義　教授　末永　雅雄

經濟學專攻

（第一類）

経済理論研究　講義演習　教授　三谷　友吉
金融経済論研究　講義演習　教授　森川　太郎
証券経済論研究　講義演習　教授　今西庄次郎
信託経済論研究　講義演習　教授　板橋　菊松
景気変動論研究　講義演習　教授　中川屑太郎
一般経済史研究　講義演習　教授　矢口孝次郎
日本経済史研究　講義演習　教授　鋳方　貞亮
会計学研究　講義演習　教授　久保田音二郎
財政学研究　講義演習　講師　中川与之助

（第二類）

経済学史研究　講義　講師　堀　経夫
国際経済論研究　講義　講師　正井　敬次
ドイツ経済史研究　講義　講師　宮下　孝吉
企業財務論研究　講義　講師　丹波庸太郎
監査論研究　講義　講師　陶山誠太郎

学　部（第一部第二部共）

法學部

教　授

民法第三部、法学演習　明石　三郎
社会学、政治学概論　岩崎　卯一
政治史、政治学、外国政治書　池田　栄
商法第一部、第三部、法学演習、英法　池垣定太郎
刑法第一部、第二部、法学演習　植田　重正
国際法第一部、第二部、外国政治書、政治学演習　川上　敬逸
民法第四部、法学演習、仏法　木村　健助
日本国憲法、英法、行政法第一部、第二部、法学演習　桜田　誉
法理学、憲法　中谷　敬寿
民法第四部、独法、法学演習　福島　四郎
行政法第二部、憲法　渡辺宗太郎
民法第一部、民法第二部、英法、法学演習　和田　豊二

専任講師

英法　岩本　憲
法学、日本法制史　石尾　芳久
日本国憲法、法学　内田　修
法学、刑事学、英法　中　義勝

員外教授

社会法　浪江　源治
商法第二部　西本　寛一

兼任教授

新聞学概論　井上吉次郎
経済政策　今西庄次郎
英語（四）　榎本金次郎
英語（一）　小野　勇
英語（四）　梶原　秀男
社会政策、社会思想史　河野　稔
社会思想史、経済学　沢村　栄治
英語（一）　進藤浩二郎
経済原論　杉原　四郎
日本文学　島田　退蔵
倫理学　田中　熙
仏語（四）　中井　駿二
物理学　橋田　慶蔵
経済政策　松原　藤由
独語（二）　見次　直雄
商学、英語（一）　山崎　紀男
日本文学　吉永　登
人類学　横田　健一

兼任助教授

心理学　川口　勇
英語（三）　広岡　英雄

講　師

行政学　足立　忠夫
日本史　有阪隆道
仏語（四）　池長　澄
東洋文学　板原　哲夫
日本法制史　猪熊　兼繁
英語（一）、（四）　上島　喜三
仏語（三）　宇野　史郎
国法学　大石　義雄
信託法　大阪谷公雄

独語　大崎　義夫
統計学　岡部　利良
英語　岡橋　佑
英語(二)　小川　忠蔵
仏語(三)　小方　厚彦
独語(一)　梶野　艮
仏語(一)　鎌田　博夫
政治学、政治哲学　木下　丹
英語(一)　木村　達夫
英語(二)　栗駒　正和
独語(一)、(二)　久保田　肇
財政学　小谷　義次
社会学概論　小山　隆
仏法、国際私法　斎藤　武生
独語(三)　斎藤　清
刑法第二部　佐伯　千仞
仏語(一)　荘保　三郎
独語(四)　鈴木　重貞
英語(二)　菅沼　舜治
仏語(一)　竹村　茂助
仏語(三)　田中敬次郎
西洋法制史　田中　周友
生物学　田中　英雄
仏語(二)　田辺　純夫
外交史　立川　文彦
地方自治　高橋　貞三
英語(一)　玉木意志太牢
倫理学　筧田　知義
英語(四)　内藤　政雄
独語(四)　中川　清三
英語(三)　庭田　四郎
商法第二部、法学演習　西原　寛一
英語(二)　星野　信夫
仏語(二)　堀井令以知
英語(一)、(二)、(三)　増田、忠雄
英語(二)　三宅川　正
英語(三)　水谷　揆一
独語(二)　溝辺　龍雄
法律思想史、ローマ法　武藤　智雄
刑事訴訟法　毛利　与一
政治学史　森　義宣
民事訴訟法第一部、第二部　山木戸克己
独語(一)　米田　巍
英語(四)　吉田　安雄

文學部

教授

日本漢学史、東洋史特殊講義A　石濱純太郎
東洋史演習　石濱純太郎
日本文学、近世文学、国文演習(二)　飯田　正一
新聞学概論、新聞経営論、内外時事解説、新聞演習(三)　井上吉次郎
独語B、独文学作品研究(三)　上道　直夫
独文学演習(二)　田辺　直夫
作品研究英米劇文学、英語(四)　榎本金次郎
上古文学　沢瀉　久孝
哲学概論、西洋哲学史概説(一)A　岡野留次郎
哲学講読及演習(一)B、西洋哲学史概説(二)、哲学特殊講義、哲学講読及演習　大小島真二
英語A、作品研究英米散文文学、英語(一)、英語(三)　小野　勇
日本文学、国文演習(一)　金子又兵衛
英語B、演習英米詩文学　梶原　秀男
英語(一)、演習英米散文文学、英語B　進藤浩二郎
日本文学、国文学史、専門国語　島田　退蔵
日本及東洋美術史、考古学概論　末永　雅雄
支那文学史概説(一)、支那文学演習、支那文学史概説(二)　高橋　盛孝
倫理学、倫理学概論　田中　熙
支那文学作品研究(一)、支那哲学史概説、支那文学作品研究(二)、支那文学演習、専門漢文　壺井　義正
仏語(四)、文学概論、演劇映画学概論論説論、新聞演習(二)　中井　駿二
西洋史概説、西洋史特殊講義B、西洋史演習　原　弘二郎
英語(三)、演習英語学、英語学史演習ラテン語、ギリシヤ語　広瀬　捨三
新聞発達史、新聞英語、新聞演習(一)　藤田進一郎
独語A、独語史、中世独文学及語学　福本喜之助
英文学史、作品研究英米詩文学　堀　正人
仏語A、仏語B、仏語(四)、仏文学作品研究(一)、仏文学演習(三)、仏文学特殊講義　三木　治
独語C、独語(二)、独文学演習(一)　見次　直雄
英語(四)、米文学史、演習英米劇文学　山田松太郎
日本文学、中古文学、国文演習(二)、吉永　登
人類学、史学概論、日本史特殊講義B　横田　健一
日本史演習

助教授

心理学、教育心理学　川口　勇
教育原理、教育社会学、教育実習、論理学　鈴木　祥蔵
作品研究英語学、英語学史研究、英語(三)　広岡　英雄
哲学講読及演習(一)A、哲学　藤本　是
東洋史概説、東洋史史料講読、東洋史特殊講義B　三上　諦聽
英語C、英語(二)、(三)　山本栄一郎

専任講師

西洋史史籍講読、西洋史特殊講義A　秋山　博愛
(在仏留学中)　高塚洋太郎
社会科教育法、教育史、教育実習　筧田　知義
英語(四)　星野　信夫

員外教授

近古文学　小島　吉雄
独文学史、独文学演習(三)　渡辺　格司

兼任教授

政治学　池田　栄

社会学　岩崎　卯一
数学　河村　信一
人文地理　宇田　米夫
社会思想史　河野　稔
論理学　加藤由次郎
日本国憲法　桜田　誉
経済学　沢村　栄治
経済原論　杉原　四郎
物理学　橋田　慶歳
商学　山崎　紀男

講　師

専門国語　秋本　吉郎
日本史　有坂　隆道
独語(四)　荒木　泰
東洋文学、専門漢文　板原　哲夫
ラテン語、言語学概論、ギリシヤ語　岩倉　具実
生物学　生沢万寿夫
仏文学史　伊吹　武彦
仏文学演習(一)　石川　湧
西洋史特殊講義C　猪谷　文臣
日本史概説　魚澄惣五郎
仏語(三)　宇野　史郎
法学　内田　修
独文学特殊講義(一)　内山貞三郎
実用英語　エー・ストライク
統計学　岡部　利良
英語(二)　小川　忠蔵
仏語(三)A、B、仏語学概論小方　厚彦
英語(三)　岡橋　祐
独語(一)　梶野　良

作詩作文法　川村勝太郎
編集論、取材論、新聞文章論　金戸　嘉七
仏語(一)　鎌田　博夫
政治学　木下　丹
英語(一)　木村　達雄
自然地理学概説　木村　春彦
宗教学概論　久山　康
社会学概論　小山　隆
独文学特殊講義(二)　小牧　健夫
世論及宣伝　小山　栄三
英語学概論　神津　東雄
仏文学作品研究(二)、仏文学演習(二)　佐野　一男
独文学作品研究(一)、独語(三)　斎藤　清
近代文学　榊原　美文
独語(二)　里井宥二良
独語(三)　潮崎　俊一
日本史特殊講義C　柴田　実
仏語(一)　荘保　三郎
実用英語　ジュデー・レヴィー
数学、科学概論　杉原　雅
独語(四)　鈴木　重貞
英語(二)　菅沼　舜次
職業科教育法　田中　健一
商業科教育法
仏語C、仏文学作品研究(三)　田中　栄一
生物学　田中　英雄
仏語(一)　竹村　茂助
印度哲学史概説　高島　寛我

仏語(二)　田辺　純夫
英語(四)　田辺　清市
英語(一)　玉木意志太牢
日本史史料講読　竹田　聰洲
西洋美術史、美学概論、演劇映画学概論　辻部政太郎
支那語(初級)、(上級)　辻本　春彦
法学　中　義勝
独文学作品研究(二)　中村　恒雄
英語(一)　内藤　政雄
国語科教育法　西山　隆二
英語(二)　庭田　四郎
国語学概論　林　和比古
人文地理学概説　樋口　節夫
英米仏哲学　樋元　和一
放送論　藤田　義信
東洋史特殊講義A、C、哲学　藤本　勝次
哲学　細川　重
仏語(二)　堀井令以知
外国語科教育法　増山　節夫
教育心理学、心理学概論　正木　正
英語(二)　三宅川　正
独語(二)　溝辺　龍雄
英語(三)　水谷　揆一
日本史特殊講義A　村山　修一
独語(四)　矢野　純臣
英語C　山本　忠雄
中古文学　山脇　毅
独語(一)　米田　巍
英語(四)　吉田　安雄

近世文学　吉永　孝雄
米文学史　ネーサン・シー・スター

經濟學部

教　授

日本経済史、演習　鋳方　貞亮
経済学、経済原論、社会思想史、演習　沢村　栄治
英文経済書、経済原論、演習　杉原　四郎
経済統計学、統計学、数理経済学、英文経済書、演習　高木　秀玄
国際経済論、経済変動論、英文経済書演習　中川庸太郎
経済政策、工業経済学、産業総論、演習　松原　藤由
経済学史、経済原論特殊研究、演習　三谷　友吉
金融経済論、演習　森川　太郎
経済史、演習　矢口孝次郎

専任講師

経済史特殊研究、英文経済書　荒井　政治
英文経済書、独文経済書　市原　亮平
農業経済学、英文経済書　東井　正美

兼任教授

民法第一部　明石　三郎
日本文学　飯田　正一
政治学　池田　栄

銀行及信託論　板橋　菊松
証券市場論、演習　今西庄次郎
社会学　岩崎　卯一
経済地理学　宇田　米夫
会計学総論、演習　植野　郁太
英語(四)　榎本　金次郎
論理学、社会思想史、経済哲学　加藤由次郎
仏文経済書、演習　賀屋　俊雄
社会政策、社会思想史、演習　河野　稔
英語(一)、(四)　梶原　秀男
日本文学　金子又兵衛
国際法　川上　敬逸
化学、数学　河村　信一
商業経済学、演習　進藤浩二郎
英語(一)　田中　熙
倫理学　高橋　盛孝
人類学　広瀬　捨三
英語(三)　見次　直雄
独語(二)
銀行及信託論、貨幣論、演習　安田　信一
商学　山崎　紀男

兼任助教授

心理学　川口　勇
英語(三)　広岡　英雄
哲学　藤本　是
英語(二)、(三)　山本栄一郎

講師

世界史　秋山　博愛
生物学　生沢万寿夫
仏語(四)　池長　澄
法学　石尾　芳久
仏語(一)　石川　湧
東洋文学　板原　哲夫
英語　岩本　憲
法学(一)、(四)　上島　喜三
日本国憲法、行政法　内田　修
仏語(二)、(四)　小方　厚彦
英語(一)　小川　忠蔵
独語(二)、(四)　大崎　義夫
英語(三)　岡橋　佑
仏文経済書　柏尾　昌哉
保険論　川元　英二
日本文学　釜田喜三郎
政治学　木下　丹
独語(一)、(三)　久保田　肇
商法第一部、第二部　国歳　胤臣
英語(二)　栗駒　正和
財政学　小谷　義次
独語(三)　齊藤　清
独語(三)　潮崎　俊一
英語(二)　菅沼　舜治
数学　杉原　雅
独語(四)　鈴木　重貞
仏語(一)　荘保　三郎
経営経済学　田杉　競
佛語(三)　田中敬治郎
独語(二)　田中　健二
生物学　田中　英雄
英語(四)　田辺　清市
仏語(三)　田辺　純夫
公企業論　竹中　龍雄
仏語(一)　竹村　茂助
社会学　棚瀬　襄爾
英語(一)　玉木意志太牢
英語(四)　内藤　政雄
独語(四)　中川　清三
独語(一)　中村　恒雄
人文地理学　中村良之助
財政学特殊研究　西川　清治
英語(三)　庭田　四郎
仏語(二)、(三)、(四)　原　政夫
経営経済学　降旗　武彦
英語(一)、(二)　星野　信夫
外国経済事情　細野　武雄
経済思想史　堀　経夫
仏語(二)　堀井令以知
英語(一)、(二)、(三)　増田　忠雄
国際金融論　松井　清
英語(二)　三宅川　正
独語(四)　矢野　純臣
独語(一)　米田　巍
独語(三)　渡辺　格司

商學部

教授

銀行及信託論、商学特殊研究　板橋　菊松
証券市場論、経済政策、演習　今西庄次郎
会計学総論、経営学総論、演習　植野　郁太
貿易実務論、商業英語、仏文経済書　賀屋　俊雄
演習
労務管理論、社会政策、社会思想史、演習　河野　稔
配給論、演習　河村　宜介
銀行及信託論、金融経済論、演習　安田　信一
英文経済書、商学　山崎　紀男

専任講師

英文経済書、仏文経済書　柏尾　昌哉

兼任教授

民法第一部　明石　三郎
演習　鋳方　貞亮
日本文学　飯田　正一
政治学　池田　栄
社会学　岩崎　卯一
経済地理学　宇田　米夫
論理学、社会思想史　加藤由次郎
英語(四)　梶原　秀男
日本文学　金子又兵衛
国際法　川上　敬逸
商品学、化学、数学　河村　信一

経済学、演習　沢村　栄治
英語(一)　進藤浩二郎
経済原論、演習　杉原　四郎
倫理学　田中　熙
経済統計学、統計学、演習　高木　秀玄
人類学　高橋　盛孝
簿記(一)　冨山　忠三
仏語(四)　中井　駿二
国際経済論、経済変動論、演習　中川庸太郎
英語(三)　広瀬　捨三
工業経済学、産業総論、演習　松原　藤由
演習　三谷　友吉
経済原論、演習　森川　太郎
経済史、演習　矢口孝次郎
英文経済書　山口　辰雄

兼任助教授

心理学　川口　勇
経営学特殊研究　鮫江　城夫
英語(四)　広岡　英雄
哲学　藤本　是
英語(二)、(三)　山本栄一郎

講師

世界史　秋山　博愛
独語(三)　荒木　泰
生物学　生沢万寿夫
法学　石尾　芳久
仏語(一)　石川　湧
東洋文学　板原　哲夫
独文経済書　市原　亮平
法学　岩本　憲
仏語(三)　宇野　史郎
日本国憲法　内田　修
英語(一)　小川　忠蔵
独語(一)　大崎　義夫
経営比較論　岡部　利良
保険論　川元　英二
独語(一)　梶野　朖
佛語(一)　鍾田　博夫
日本文学　釜田喜三郎
政治学　木下　丹
英語(四)　木村　達雄
工業簿記、原価計算　久保田晋二郎
商法第一部、第二部　国歳　胤臣
財政学　小谷　義次
独語(一)　里井宥二良
独語(三)　潮崎　俊一
英語(二)　菅沼　舜治
数学　杉原　雅
佛語(一)　荘保　三郎
生産管理論　園田　理一
独語(二)　田中　健二
生物学　田中　英雄
佛語(二)、(三)　田辺　純夫
公企業論　竹中　龍雄
社会学　棚瀬　襄爾
英語(一)　玉木意志太牢
企業財務論　丹波康太郎
英語(一)　内藤　政雄
財政学　中川与之助
独語(一)　中村　恒雄
人文地理学　中村良之助
英語(二)　庭田　四郎
仏語(二)、(四)　原　政夫
英語(二)、(四)　星野　信夫
外国経済事情　細野　武雄
会計学特殊研究、工業簿記原価計算、会計監査及分析　堀江　義広
国際金融論　松井　清
英語(三)、商業英語　水谷　稔一
標準原価予算統制　溝口　一雄
独語(四)　矢野　純臣
商業数学　山口吉兵衛
独語(一)　米田　巍

体育（各学部共通）

員外教授

講義、実技　石渡　俊一

講師

柔道　伊藤　徳治
講義　鎌倉　勝夫
バドミントン　川口　清
陸上競技、体操　岸源左衛門
ソフトボール、陸上競技　小林　繁
バレーボール　清水　剛
バレーボール　高橋　哲雄
陸上競技　中川　敬
バレーボール　西山　勝次
バレーボール、陸上競技　原　利一
フェンシング　福田宗次郎
講義　山野　俊雄
卓球　山本彌一郎
撓競技　吉田　誠宏

短期大学部（第一部、第二部共）

商工経営科

教授

工場管理、工作法、設計製図　入江　深
経済地理学、経済地理特殊研究　宇田　米夫
物理学、生産材料、原動機　太田　雞一
数学、商品学　河村　信一
哲学　加藤田次郎
商業概論、英語経済書講読、商業経営学特殊研究　佐伯　三郎
工業概論、商業数学、設計製図、機械工学特殊研究　佐々木富五郎
英語(一)、(三)　角田　文雄
簿記会計学、英語経済書講読、会計学特殊研究　冨山　忠三
数学、原動機、電気工学特殊研究　橋田　慶蔵
英語(二)、(四)　山口　辰雄

助教授

（二三頁）

カルメラ

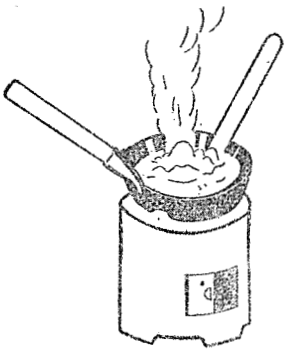
橋田慶蔵

戦後食糧不足の華やかなりし頃、米の代りと称して砂糖が配給された事があつたのは記憶に新らしいところである。最初の間は、受取つた砂糖の山を眺めても余した情好だつたが、誰云うとなくこれを使つてカルメラを焼くということを思い出して一時は百貨店などでも、この実演をやつて道具や薬味なども売出す始末、生活を楽しむという日本人のいゝ癖と笑つては見たものゝ、あの見事な梅の花が出来る過程を眺める時、われわれの年輩にはカルメラを焼いた幼年時代の懐しい追憶がよみがえつて来て、何とも云えぬ「盛上る感じ」の誘惑が忘れられずともすれば一つ作つて見たいと言う衝動に駆られることがあつた。

予期したように、うまく梅の花が咲いて呉れればよいが、砂糖の加減か、火加減か失敗する確率も多いらしい。二、三の友人に聞いて見ても確かにその方が多い様である。本誌の読者諸賢にもこの失敗の御経験の持主の方が多いのではないかと愚考するのは失礼に当るだろうか。

実のところカルメラ製法のコツを探ること自体が趣味の一部であつたので、これには相当時間をかけた割に、科学的に成功したとは言えかねるのであるが、科学論文のまねをしてまとめて見たものを御目にかける。

（一）在来言ひ伝えられた方法と成果の要約。——小さい銅の鍋に、ザラメ糖と云う砂糖を少々入れ、之に水の少量を加え、火に掛けると盛に発泡する。之れを棒で攪きまはし、頃合を見て火から下ろし、炭酸を棒の先につけて、更に早く



攪きまはした後、棒を引くと、鍋の中に見事な梅の花が咲いてゐる。——此の説明こそ、誠に尤もなのであるが、現在流行の言葉で言ふと、デテイルを述べていないのであつて、カンジンなところは、カンで行けと言つてゐるやうである。だから此の「カン」を或る程度まで鮮明出来ないか、と言ふのが筆者の悪い趣味と言へば、そうとも言える。

（二）稍や成功した一例。うまく焼く練習が積めて、心に予猶が出て来ると、梅花が咲き出る瞬間に紙よりで、旗まで付けることが出来る。鍋の中の泡立ちをタンネンに攪きまわし、炭酸を入れてから、愈々急に練り廻す時間の長いのに引き換え、此の瞬間は文字通りの瞬間であつて、あれあれと見る間の短かいものだが、うまく花が咲いた場合には、その梅花の素晴らしさを以つて、それまでに払つた努力に充分報いて呉れる。

（三）悪体のさまざま。どうかして、うまく出来ないと、さまざまの悪体を呈する。然し此の醜態の諸相こそ実は研究（？）と言ふものにとつて、大切なのである。思い切りよく湯気をたてゝ膨れて来たなと喜んでいると、あたかも、シューと音をたてたかのやうに凹んでしまうのを、失敗の第一等の見本とする。炭酸を入れて、かき廻すや否や、色が白くなつて、素晴らしい星雲の写真のやうな荒模様が出て呉れたのわよいが、棒をギリギリと手がだるくなるまで廻しても、いつまで過つても膨れて来ずに、面（メン）の模様も消え去つて、褐色のカケラになつてしまうのもある。第三番目は面がペタペタにしか乾いて来ないで、全く水分が抜け切らぬ場合もある。最後は此の反対に、充分に水分が抜けたその以上に、砂糖が焦げ付いて、褐黒色を呈し、全くの飴になつてしまい、苦くて食べられない。出来た飴にうつかり指をつけると、細い飴の糸を引いて、ひどくやけどをする。此んな余興はまう、製造操作とは言えない。

（四）雑多な面相。結局用いた砂糖は、火に掛けられ、炭酸を加えられると、千変万化すると言はねばならぬ。うまく出来る場合の他に、種々雑多の両相があるので、素人には仲々的中的のコツと言うものが呑み込めない。それで、そのコツを会得する予備知識として、次のやうなことを知つておかねばならぬと思う。

砂糖に水を加えてからの状態を次のように分類して見る。之は勿論通俗的ではあるが。

（イ）砂糖に水が加わつて、砂糖水となつているもの。

（ロ）蜜と称する状態のもの。

（ハ）充分脱水されて、再びもとの砂糖に類似の砂糖に還元したもの。

（ニ）飴の状態のもの。

等がある。此の区別は、大体材料の名で性質を表はしているが、理論的表現としては不充分な所もある。又此の状態が出来て来る順序も必ずしも一定して居らぬようである。

（五）カルメラの本来の性質に依ること。だから、科学的（？）にも完全な言いまわし方で、普遍的な表現方法は如何？又素人でも必ず出来る、必ず判るコツと

言うものが、此のような、「快刀乱マ的」でない原因は、目標が偶然にも、そんなのであるからで、此の問題に取り組んだ者の受ける可き試練かも知れない。

（六）原料の砂糖。大分けにして、ザラメ糖、中ザラ、白ザトウの三種がある。もつと色々の種類も売つておる筈だし、化学的（？）にはブドウ糖を初めとし、果糖、蔗糖の区別もある。ところがどの砂糖を使つても出来る自信はある。但し、操作の最後に「棒を抜き、且つ形の中心を作る」だけの予猶を与えて呉れるだけの状態を与えて呉れさえすれば——の条件付である。

（七）薬味。膨脹剤は、重曹（炭酸）、炭酸アンモニウム、蛋白質（タンパク質）その他に分れる。就れも食用と念を押して、薬屋で求めるのがよい。蛋白質は玉子の白味のこと。前二者は発泡用であつて、化学作用で、炭酸ガス、水分（蒸気の状態）、アムモニヤ瓦斯を出す。その粉末の細かさの点からは、重曹が優れ、発泡力の点からは炭酸アムモニウムが優れておる。蛋白質は発泡にもなるが、製品の硬さを増す。上記は混合して用いられることもある。熱い砂糖の水分が脱出して、稍や粘性を帯び始めた時、冷却につれて正に固化するに至つて発泡の効を奏するのである。薬味を入れると何故かき廻すか？知れたこと、充分に混合させることを第一の目的とするのである。が、上記の有効な発泡前の発泡を消しつぶすためでもある。

（ハ）泡の種類。砂糖水に泡が出来て水分が脱け出る際の、泡の種類のことである。今までに斯んな説明を読んだことがない。左記のやうに泡に番号を付けたりすると、随分変なものになるが。然し斯うしないと、コトを心得るのに不便だし上手な焼き手になるためには、必須科目と云ふわけだろうか？

（イ）泡1。砂糖に小量の水を加え稍強い火に掛けると、細かい泡沫が液面全部に出来、鍋の縁には稍大きな泡が浮いておることがある。之を言う。段々鍋の縁の方の泡が大きくなつて、細かい泡がまん中に寄せられて、しまいになくなる。若し火が強いと、細かい泡全体が鍋の上面まで昇つて来る。又材料が純粋で白砂糖の完全なもので、しかも鍋が清浄なものであると、純水を加えた時には、此の泡1、は非常に少ない。依つて此の泡をなす材料は液に粘度を与えるものと解する。梅の花の出来る瞬間の作用のために、是非共、適度の粘度が欲しい時は白砂糖に、特に鍋の底に付いた飴の小量を加えたらよい。是に依つて、前の失敗の滓を二、三回に別けて利用するのにも、技術上の意味を付けたことになる。一般には黒砂糖を重さで $\frac{1}{10}$ 位加へたらよい。其の他に、ベントナイトも考えられる。

（ロ）泡2。は泡1。に引き続いて出来たもので、益んな発泡を意味し、又盛に水分を発散させるものである。余り粘くない状態を指す。ザラメ糖や飴分が多い時に、火が強いと、此の泡が多過ぎて鍋から溢れそうになる。棒で素早くかき廻して、泡を潰さねばならぬ。又反対に極度に粘性の少ない儘で煮て居ると、淡飴色の透明液の底から、小さい泡が、スイスイと昇つて来る。

（ハ）泡3。は一番大切なものであつて次の三種に別ける。

（a）泡2。の終りから始まつて液に粘性の現れ始めたものである。液が棒に粘着し始め、火力の張いときは泡大きく、火力小なときは泡小さく、泡1。と紛わしく、鍋に接している部分のものは大きい。

（b）盛に発泡している時機のもので、まん中の小さい泡のところには、周囲と同じやうな大きさの泡が混在し、現われては消え、消えては現われる。泡は唯一層だけでなく、数層に重なり、其の層が増加の傾向にある。従つて鍋の内側の全体に大きな泡が満ちていると言える。粘性が強くなつておることは想像に難くない。此の時から、鍋の温度と材料の温度とは勿論違うことを考えておく必要がある。此の状態を誤りなく認めることがコツである。

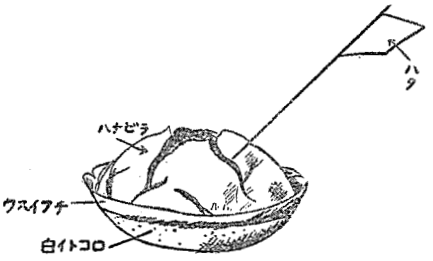
（c）正に水分が完全に、脱水の寸前であつて、泡3。の（c）とする。中央の泡愈々小さく、鍋に接した部分の泡が愈々大きい。中央には大きな泡がない。粘性は極めて大で、太い棒は材料の半分位が随いて、渦が出来る。材料全体が小泡ばかりとなり、従つて白味がかつて見える。此の時、素速く炭酸の棒でかき廻し始めるのであるが、煮つめの丹精が此の瞬間に報いられると言つても過言でない。但し直ちに「素速」と言うと一寸語弊がある。昔風に言うなら、一寸「気」を入れて、鍋を火から下ろし予め用意の縄の輪（釜敷）に掛けて置し（？）表面を「ギョウ視」する。ギョウ視では、温度わ見えぬ筈であるが、そこは心眼で泡の「具合」から、適温時を把握して、前記の「素速」さに移るのである。

（d）一の字。泡3。の（c）を見別けるのに、一の字と云う極め言葉がある。或る工業の実業家曰く。「自分は此の呼吸をよく存じております。小供であつた時、親から一銭（是は今日で言う十円に当り、当時、小供の一日分の御小づかいの全額）を貰い、何々爺さんに作らせて貰い、一年も掛つて此のコツを会得しました。」是はその一の字であつた。とのこと。カルメラ作りが如何に小供心にアツピールするものか、又コツの習得に困難があるかが判る。結局その瞬時に臨んで棒で鍋の中を横に払うと、底に一の字が出来たらよいのである。但し棒が

細かつたり、熱かつたりすると、是の時機がよく判らぬ時もある。

（e）飴のツララ。ためしに棒を液から引き上げて見ると、その先から、纖々ながら砂糖の蜜のツララが出来たらよい、との説明である。

（c）（d）（e）は皆、その瞬時を示してはいるが、左様になつて来ない場合もある。だから一概に、どれかが一つが出来るまで、それを目標にしていては失敗する。その三者が、どうして効力が薄かつたり、的中したりするかと言うと、それは其の時の火力と温度と粘力の三要件に依つて変体するからである。



（出来上りの図）

（九）潮時。前節のやうにその潮時は、あれもある。是もあると心得ておいて、実は、それ以上は結論することを差控えたいのである。その又奥の実は、科学的記述のまねをして言おうとすると、火力は四寸の鍊炭の中火で三〇〇ワット位、温度は攝氏の一三〇位である。そして最後に残る粘度に付ては、彼れ是れと度盛の定義は物理書に書いてあろうが、第一に、表面張力を測る機器を想像しても、此のやうな変転極まりのない液面を調査するのは大変なことである。国立大学の精密測定室へでも頼まないと出来ないと思う。強いて上記の三要素から見ると、温度の高い時は一の字が稍々不明であつても、ツララならば軟かくともよいとする。

（十）煮方止め。これには温度はさして重要でない。専ら粘度、言い替えると水分で定める。そして前述の「気」を入れてから適温中の温度降下の途中に操作を完成する。

（十一）重曹類の量。膨脹剤の量は相手の砂糖の量に依つて変るのは勿論であつて、瞬時の温度とか残留の水分には関係がうすいと言うことは一応の理屈がある。この正当量は幾ミリ瓦の程度である。が、化学的にも算定が成り立つ筈である。然し実際は丸い棒の先に蜜か飴がついていて、それで薬壺から重曹を引つつけて出すことになる。その量についてだけ言つても、甚だ定量的でないが、又実際に適量であるより余分の重曹は薄効であつて、苦くするばかりである。反対に小量に過ぎると、膨れないのは当り前であるが、蜜は完全脱水の場合には砂糖に還元しているのがよいので、飴の硬いのでは不良である。

（十二）卽ち完全脱水。とは泡3。の（c）を越すことであるが、温度は製品確保のためには稍低い方がよい。還元して固体になつてから、尙お鍋を火から下さないと、温度が一三〇位から急に昇り、砂糖の炭化が始まる。斯うなつてはまづいのである。此の温度急昇の最初の瞬間まで煮たならば、鍋から下し暫く様子を見る。湯気が出て、泡が消えて、嵩が低くなつたと思うと、中央から少し膨れて後固化して已む。勿論重曹を使わなかつたのだし、色も悪く、形も小さく、実用にならぬ。

（十三）固形になる寸前。をうかがつて別に用意した重曹付の棒で「急に遲まき乍ら」かきまぜる。此の時果料の泡があつても、少なくとも又は全くなくて透明のやうになつてゐても発泡する。そうして膨れるのは冷えて、固まろうとするからなのであつて、詳しく言うと、冷えるまでにグント粘度が上る。是を押し上げての発泡が、あの見事な「梅の花」の「盛上りの相」を呈するのである。

（十四）寸前の機を急ぎ過ぎて捉え。重曹を熱い間に加えると、盛に発泡するが大切な固化の温度のときには、まう重曹が消耗し尽して膨れない。余り材料に粘性が大であると、是と同様なことになる。

（十五）反対にもつと高温のまゝで脱水に至ろうとすると、盛に炭化して褐色となり、還元と同時に焦げ始める。砂糖は此の時固体と言うよりも粘体であるので、泡3。の（c）を越えたことが判らずに暗褐色のものとなり、之は飴となつてゐる。

（十六）結論。検査。好期は勿論（十三）に在る。是を自己の思ひの儘に、速めたり、遲めたり、又捉えることが出来れば一人前であるが、偖て実際には、製品を直ちに火に掛け、ウスイ縁の底をとかして鍋を逆さにして、コロンと落す。とけるのは水分のある縁だけであつて、中央部は乾いて白いのが普通である。そして鍋からコロンと容易に落ちずに、鍋が変形する程打ち付けるのは水分が多すぎた場合の製品で底に固着したものである。もつと力の入用なのは、その反対の飴になつたものである。

出来たら必ず食べて見ることである。質が均一になつて泡の形が細かいのが上等であつて、余りサクサクになつている時は、水分の多かつたものの製品であつて、又泡のあとが所々大きなものがあるのは、えてして底が正式にとれない。

肌色は黄色で質密であつて、光沢のあるのをよしとする。水分の多い時に、稍や強引に、重曹を多く使つて膨らませると、表面の肌が大いに疎で、ソバカスになり、全体が固い。泡3。の（c）を捉えるのが六ケ敷いのは、材料の中に飴がだんだん出来るのであるが、その適量を

（裏表紙より）

—— —— 1917. 1035p. 320.14 G2 1-3.

Reau, Roger. Petit dictionnaire de droit. 1951. 1359p. 320.35 R1 1

Keeton, George W. Making international law work. 1946. 266p. 327.043 K1 1

Fishel, Wesley R. The end of extraterritorility in China. 1952. 318p. 327.3022 F1 1

Dulckeit, Gerhard. Römische Rechtsgeschichte 1952. 287p. 328.32 D2 1

Schulz, Fritz. Classical Roman law. 1951. 650p. 328.32 S2 2

Wieacker, Franz. Über das Klassische in der römischen Jurisprudenz 1950. 38p. N328.32 W1 1

Evans, Austin P. Medieval Russian laws. 1947. 106p. 328.38 E1 1

Smith, Munroe. A general view of European legal history, and other papers. 1927. 446p. 329.02 S1 1

James, Philip S. Introduction to English law. 1950. 431p. 329.3 J4 1

Tanner, J.R. Constitutional documents of the reign of James I., A. D. 1603-1625. 1952. 389p. 329.311 T1 1

—— Tudor constitutional documents, A. D. 1485-1603. 1951. 636p. 329.311 T1 2

Mitteis, Heinrich. Deutsche Rechtsgeschichte 1952. 175p. 329.402 M1 1

Kranz, Heinrich. Die Narkoanalyse als diagnostisches und kriminalistisches Verfahren. 1950. 38p. N329.423 K1 1

Deutschland. Zivilprozessordnung für das Deutsche Reich vom 30. Januar 1877. 1949. 386p. 329.453 D2 3

Olivier-Martin, Fr. Precis d'histoire du droit français. 1953. 487p. 329.502 O1 1

Nicolo, Rosario. Codice civil e leggi speciali. 1949. 916p. 329.73 N1 1

得たならば肌色がよくなる。意識して飲気の多い（c）を作つた場合は重曹を多くするか、又は炭酸アムモニユウ等の発泡力の多いものを用うる。キャラメルを一個位使えそうに思えるがまだ実験はしていない。

右の様に検査をして、その結果に鑑みて、（c）の状態を少しづつ、最適の方へ移動させて行く。是は原料が仲々同一組成でないことに対する策でもある。

此の実験とか練習は、日光のよく当る明るい処を選ぶべきである。そのわけは暗い処では水分の蒸発が目に見えぬからであり、此の蒸気の観察がカンに影響することが大である。

そして最後に、製品の風味であるが、重曹が最も少なくて、糖の焦げた味のするのがよい。若し何かの好みで他の香料を使いたい時は、発泡剤に便乗することが望ましい。又製品は一日を経過すると水分を吸つて軟くなり味が落ちる。

（附記）（c）の状態のものを大規模で作り、回転とか、往復運動を使い、工業的に連続的に製することが出来たら、どんな種類の菓子が出来るだろうか？是は私の夢であるが。（一九五三・四・二九）

（短大教授）

（一九頁より）

商業経営学、経営学特殊研究　鯰江　城夫

兼任教授

貿易実務　賀屋　俊雄

交通論、交通経済学特殊研究　河村　信一

経済原論　杉原　四郎

統計学　高木　秀玄

倫理学　田中　熙

産業概論、工業経営学　松原　藤由

経済史　矢口孝次郎

講　師

体育（講義、実技）　石渡　俊一

商法概論　岩本　懸

法学　石尾　芳久

歴史　今井　啓一

日本国憲法　内田　修

仏語（一）、（二）　大坪　一

租税法規　逢坂　勝見

英語（四）　川並　秀雄

独語（一）、（二）　久保田　肇

金融論、財政学　中村　精

法学　中　義勝

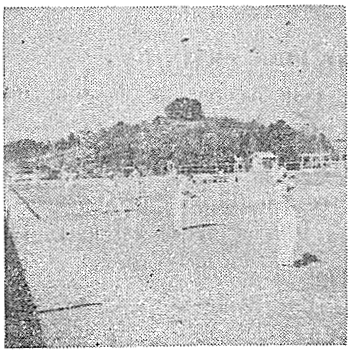
工業経営学　藤川　健治

工業簿記、原価計算　堀江　義広

商業英語　水谷　癸一

英語会話　ジュデー・レヴィー

學生



新緑の若葉に色どられた学園皐月の微風の中で学生が描く様々の姿態の中から拾ひあげた各部の活躍を展望して見よう

⊙野球部―春のシーズン学生スポーツの花関西六大学野球に優勝候補の随一として今年の活躍を期待されてゐた当部は予想通り栄冠の道を一歩一歩着実に進んではゐるが、去る四月二十八・九日に行はれた対立大戦には、一・二回戦共逆転勝といふ苦しい試合をしたが、覇権の山とみられてゐたゞけに、同大・関学戦を残こした後半戦、その中特に関学が対同大戦に見せた打力を約一ケ月後迄持ち続けるとすれば、打棒を誇る同部は立大戦に経験した以上の総力を傾けなければならないだらう。今四月中の対戦成績を記すると次の通りとなる。

四月十一日 本学12―2京大 勝 西宮
四月十二日 本学5A―1京大 勝 西宮
四月十八日 本学6―1神大 勝 西宮
四月十九日 本学1A―0神大 勝 西宮
四月廿八日 本学6―5立大 勝 西宮
四月廿九日 本学8A―7立大 勝 西宮

⊙硬式庭球部―関西学生春季トーナメントはシングルス一〇八名、ダブルス五二組参加のもとに中もづコートで四月六日より行はれたが、同部は第三シード選手辰馬以下が出場したが、第三日目四回選にシングルスで辰馬がノーシードの柴田(同大)に惜敗、ダブルスにも辰馬・松堂組・藤野・宇田組も第三日目、三回戦に惜しくも敗れたが、今春整備されたコートでの精進により今後の活躍が期待される。

⊙ホッケー部―関西学生春季ホッケーリーグ戦は同部が昨年度に引続き無敵関大の実力を充分に発揮するものと思はれる。その第一戦が四月二十五日行はれたが神大を一方的に敗り大勝した。

四月廿五日本学15―0神大西宮
(6―0, 9―0)

⊙弓道部―昨年、同好会として発足したが今年度部に昇格した同部は四月十八日同志社大学に於て本学、同大 京大、京医大参加で関西学弓道連盟が結成された。本学松岡が副委員長に鎌田が委員に選出された。

部昇格後最初の行事である段階審査会が鐘紡淀川弓道場で行はれ同部より出場した左の四名が夫々昇段の認可を得た。

四段 松岡 勇
二段 鎌田 益弘
初段 広瀬 隆之
初段 奥西 政一

⊙バドミントン部―大阪学生選手権にシングルス、ダブルス、團体の全選手権を獲得した同部は、近畿二府四県の精鋭を集めた第三回近畿選手権大会に、大阪大会の余勢をかつて、此れに出場、シングルス・ダブルスに制覇優勝の栄冠を得た。

ジュニヤー・シングルス
四回戦 本学多田2―0奈良藤田
(15―6, 15―1)
本学寺口0―2兵庫藤田
(11―15, 5―15)
寺口は藤田(兵庫)に善戦したが準決勝を前にして惜しくも敗れた。

準決勝本学多田2―1兵庫佐々木
(15―18, 9―15, 15―8)

決勝 本学多田2―0藤 兵庫田
(15―5, 15―3)

ジュニヤー・ダブルス
準決勝本学 多田 寺口 2―0白 子 相 川 京都
(15―0, 15―12)

決勝 本学 多田 寺口 2―0藤 田 兵庫 佐々木
(15―9, 15―1)

⊙撓競技部―闘将須磨を送つた同部は、新主将深山に率いられ一意強化に努力してゐたが去る四月二十五日対同志社第一回定期戦を本学体育館で開催したが圧倒的に同志社を敗りさつた。

本学 10 ― 5 同志社大 本学体育館

先鋒 森田2胴・胴― 0藤井
腰塚2面・胴― 0小原
上田2面・面― 0木村
平海2胴・胴― 甲手 1秋山
山内1甲手 ―甲手・甲手2伊藤
米谷2甲手・胴― 0小松
松谷1面・ ―甲手・面 2鵜飼
佐伯2面・面― 0小島
中堅 谷 2面・面― 0近藤
酒井0 ―甲手・面 2平山
吉羽2面・胴― 0諏訪
高本1面 ―面・甲手 2片山
増田2甲手・甲手― 甲手 1中村
副將 和田2甲手・面― 面 1山内
大將 深山1胴 ― 面・面 2富本

⊙卓球部―遠く広島に春季合宿を行ひ一意部の強化に努めた同部は、大学学連春季リーグ戦に参加5勝4敗の戦績を挙げ優勝の栄冠を得た。

第一回戦 本学4―1大阪薬大
第二回戦 本学4―2近畿大

第三回戦　本学4—1学藝大
第四回戦　本学2—4経大
第五回戦　本学4—3大市大

◎**軟式野球部**—今春非常に充実した同部は専用グランドを所有してゐないので練習場に悩まされてゐるが、此等の悪条件を破つて関西六大学軟式野球リーグ戦に立大、大阪大と夫々敗り優勝の色を濃くしてゐる。

四月廿五日本学2　—0立命大　中モズ
四月廿六日本学4A—1立命大　中モズ
五月二日　本学19　—5大阪大　中モズ
五月三日　本学5A—1大阪大　中モズ

◎**ハンドボール部**—昨秋第三位にシードされた同部は春季トーナメントに神戸市大、大阪市立大を敗り準決勝に進出第二ゾーンで大歯大と優劣を争ふことになつたが、奮起大歯大を敗り第一ゾーンの勝者と決勝を争ふこと希ふ。過去の戦績は次の通り

五月二日　本学24—1神戸大　西宮
五月三日　本学20—5大阪市大　西宮

◎**軟式庭球部**—宇治山田で強化合宿をした同部は第七回全国軟式庭球大会に本学岡本・笠原組は準々決勝で元吉・安部組（小倉製鋼）に4—0で敗れ、充分に実力を発揮しないで終つたが有望新人を獲得した同部の活躍が期待される。

「文化部」

◎**ユネスコ部**—四月二十六、七、八、九の四日間東京原宿の社会事業会館に於いて行はれた。全日本ユネスコ学生連盟大阪代表として本学吉名、西野両君が参加昨夏大阪での大阪大会以後半年目に全国二十二團体参加（加盟二十七團体）盛会の裡に幕を閉ぢた。

会期中各地の実情の報告、今後の方針等が討議されたが都市と地方との意思の疏通と云ふ面で幾多問題が提出したが、決議事項として次の六項目が決定された。

第四回全国委員会決議事項

一、日本ユネスコ学生連盟機関誌の発行統一研究の発表と各地活動報告を主とす。
一、関係資料飜訳事業の件
　各大学加盟員による各国ユネスコ関係書著作権に関しては文部省が解決する。
一、交換ゼミナール
　文書による交換ゼミナール。本年度は
　A、家族制度（主として家庭内）
　B、基地の子の受けた影響とその対策
　を統一問題とする。八月長崎大会迄に研究を終り大会にて最終討議を行ふ。
一、日本青年團協議会との協力
　ユネスコユースムーブメントによる
一、ユネスコ活動に関する法律に基く地方機令の設置を要請する。之れは国内委員会（文部省）で進行中
一、ユネスコクーポンえの協力
　文部省より要請があつたので受理する。

以上が今大会の決議であるが次期全国大会は八月長崎で行はれる予定である。

◎**學研部**—ソ研・学研本部共催により自四月十五日至十八日、及び自二十日至二十三日間新入生並に在学生にソ聯紹介のソ聯展が尚志館で開かれ、その最終日には法文特別教室で日中友好講演会が開催され、学生にソ聯、中共に対しての認識を色々な意味に於いて深かめた。

◎**グリークラブ**—例年の如く入学式に出場学歌の斉唱に指導の役割りを果たしたが、全ゆる機会に各部との特に軽音、交響楽團等と連絡をとり本学の低調な音楽に対する意欲を向上することが望まれる。

◎**千里山法律學会**—本年度新入会員五十三名を獲得し、総員百四十四名を数へる同会は本年度事業として左記のものを予定し、猶ほ実施してゐる。

一、学内に於ける研究活動
　1、憲法研究会　毎土曜日三時限（一年次）
　2、民法研究会　毎土曜日二時限（二年次）
　3、刑法研究会　毎水曜日二時限（二年次）
　4、訴訟法研究会　毎火曜日二時限（三年次以上）

此の外に教授、講師を招いて月一回例会を開く。

一、学外に於ける活動、関西学生法学連盟に所属して、年四回開かれる討論会に参加する外、加盟各校が共同して教授を囲むセミナールを開く。
一、法意識実態調査は例年の如く行はれるが調査地は未定である。
一、其の他「法理論の研究とその応用」及び会員相互の親睦を計る上から法廷傍聴等を随時実施する予定である。

学生ニュース

弓道部復活

弓道部は本春四月より十年振りに復活榎本教授を部長として発足した旨学報局宛連絡があつた。爾後の活躍を期待する次第である。尚首脳スタッフは次の通り

部長　榎本金次郎（文学部教授）
主將　松岡　勇（法二）
副將　鎌田　益広（商二）
〃　奥西　政一（商二）
マネージャー　広瀬　隆之（商二）

和製スプーナリズム

——閉中自から忙あり——（迷亭）

小野　勇

ジョン・フォード一座演ずる評判の「静かなる男」を見ていたら、お節介者のフリンが、主人公の Sean Thornton を紹介する時「ソーン・ショートン」と言う場面があつたのでスプーナリズムと呼ばれている言語現象を憶い出した。Spoonerism（頭音轉換）は、意識的に、しかしより多く無意識的に二語又はそれ以上の語の頭音を転換することで、その名は、オクスフォードのニュー・コレッヂの学長であつた Rev. W. A. Spooner（一八四四——一九三〇）に因んで出来たと言うことである。なんでも、先生は屢々こうした誤りをやつたと言う事だが、就中、ある儀式の際に言つた *Kinqueering congs their titles take* の一句は、種々の辞書類に引例されて、スプーナ師の名を永く後世に残す事になつた。不朽の名を留めるのにも、色々な留め方があるものだと感心する。辞書に引用されている例も、なかなか微笑ましいものが多い。その二、三をあげると、Ide has just received a *blushing crow.*（＜*crushg blow*）Give me a well-*boiled* icicle（＜well-oiled *bicycle.*）Yes, indeed; the Lord is *shoving leopard.*（＜*loving shepherd*）等がある。「粉砕的一撃」を喰う代りに「顔赤らめし鳥」をいただいたり、「たつぷり油を注した自転車」でなくて「充分ゆでた氷柱」をくれと願つたり、神様が「牧羊者をお可愛いがり」にならずして「豹にお突きを喰わし」たりされるところ、実に以て愉快であると申さねばならない。しかしこう言う誤りは、話し言葉に於て起る現象で、意識的にある人の言葉の言い間違をその儘記述する時以外には、文章ではあまり見当らないのが普通であろう。そこで、私達が日常、話し合い、聞き合つているお互の日本語の中に、これに類似した誤りに気附いたことがあるかどうかを考えて見た。大分以前、「英語青年」にスプーナリズムの事を書いていた人は「このワイセツはカルイ。」と言う文を引いていた。つまり「この解説は悪い。」のスプーナリズムである。昔、ある友人は度々「アルツイバーシェフ」と言う所を「アツバツイセーフ」と言つていたし、又ある人が「ベルトラメリ」と言う名を「ベルラトメリ」と言違えているのを聞いた事がある。「からだ」を「かだら」「とだな」を「とな、だ」や「茶がま」を「茶まが」と言う類はよく聞くが、こんなのは所謂 Metathesis でスプーナリズムとは言えないだろう。スプーナリズムも勿論メターシーシスの一種に違いないが、二語又はそれ以上の語間の音転換を指すのが常識である。文学部の井上先生のお話に依ると、和歌山県日高郡の辺りでは、ドとゾが取り違えられているので、その地方の人は「ゾウ物園へドウを見に行く」そうである。同じ地方で「イル」と「アル」の使用法が私達とは反対で「机は庶にイル」が「旦那さんは奥にアル」そうだ。この二つは典型的なスプーナリズムと言えるもつともその地方の人々から見れば「ドウ物園へゾウなど見に行く」連中こそスプーナリズムの愛用者だと言う事になるのであろうが、大学時代下宿していた本郷湯島のすし屋の若い板前が、「獅子」の事を「ヒヒ」と仮名書したのを見て驚いた記憶がある。こう言う人が、アフリカへ行つたら、きつと「シ火を燃してヒヒ獅子を防ぐ」のであろう。しかしこうした方言に由来するスプーナリズムは、その地方の人々にあつては最初から語観念が転倒している訳だから、純粋のスプーナリズムには入れられない。そこで漢字を連ねて熟語を造る事の多い私達の言葉では、も少しスプーナリズムの意味を拡げて、四語又はそれ以上の対句の中の二語の転換、誤用をも含めて見たら、私達の周囲に相当和製スプーナリズムを発見出来るのではないかと思う。例えば私の中学の恩師U先生が、ある時、「諸君は須らくもつと正明公大であらねばならぬ。」と訓示された。「正明公大」的表現を和製スプーナリズムに包含させると、「あの人は遠謀深慮に富んでいる。」とか「それは余りに棒小針大の言辞だ。」とか「旧所名蹟を訪ねる。」などうつかりやつてしまいそうな例が出て来る。失敗して少し向つ腹の時など「何でえ、木も猿から落ちらあ。」と来るし、社長に叱られた社員は、社長室のドアを後にした途端に小声で「鴻鵠安んぞ燕雀の志を知らんや。」とやつたりする。代議士候補諸賢の落選挨拶には「矢折れ刀蝕き」とやつても実弾で当選して「オイカサラマサ予算案」などとやるよりずつと上品だし、無藝大食のやからは、宴席で何か所望されても「能ある爪は鷹を隠すと申しまして」等ととぼけていればよろしい。ある女学生が、実朝の有名な歌を、思わず「山はさけ海はあせなん世なりともわれに二心きみあらめやも」と読んでしまつたと言う話があるが、これなどは誠にスプーナリズム中の傑作であろう。若き血に燃える彼女には「君」に二心あるよりも、どんな事があろうと「われ」

に二心を抱かぬ「きみ」の方が全く理想的である。流行した言葉を以てすれば、彼女は考え方に主体性があつて大変結構である。しかし和製スプーナリズムも、乱用されると行き過ぎてしまう恐れがある。「朝四暮三」や「八転び七起き」程度はよろしいが、長つたらしい熟語、例えば絶世の美女の形容と言う「沈魚落雁羞月閉花」などを「ラクギョチンガンヘイゲツシユウカ」とやつたら、どんな美女が出来る事やら。おそらく戦後流行のチン型ヘイ、ユー美人にでもならずにはおるまい。「フ唱フ随」と来ると、どう間違えてもスプーナリズムにならない。亭主は「夫唱婦随」と観念し、細君は「婦唱夫随」と思惟しているだろうが、発音だけでは一向喧嘩にならないから、男女同権時代を象徴するめでたき言葉と言うべきであろう。文学作品の会話の中に、スプーナリズムを織り込んだ例は余り気付かないのだが、漱石にはある。元来漱石と言う筆名が、例の「漱流枕石」のスプーナリズム「漱石枕流」から出ているのだから、きつとあると思つていたら、やはり「猫」にある。例の八木独仙に就いての苦沙弥先生と迷亭との対話に

「うん電光影裏に春風をきるとか云ふ句を教へて行つたよ」

「其電光さ。あれが十年前からの御箱なんだから可笑しいよ。……夫に先生時々せき込むと間違へて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきると云ふから面白い。……」

又

「……伯父さんは自分が楽なからだだもんだから、人も遊んでると思つて居らつしやるんでせう。」

「実際遊んでるぢやないかの」

「所が閑中自から忙ありでね」

と言う。迷亭のスプーナリズムは甚だ意識的である。

さて更に一尺竿頭百歩を進めて、言葉のスプーナリズムから、生活のスプーナリズム或は行動のスプーナリズムと言うものも考えて見る事が出来そうだ。現代はある意味ではスプーナリズムの世界である。「戦争拡大して人生き、平和来れば人死す」と言う世界であり、「卒業証書はもらつた、さあ、いよいよ明日から失職だ。」と新学士の嘆く時代である。ハムレットの言い草ではないが、関節の外ずれた世では「代金を払つて釣銭をもらう」と言うような優長さでは忽ち落伍してしまう。よろしく「つりを払つてかねをもらう」位の抜目無さが必要である。こんな外国漫画を憶えていられる方もあるであらう。酔つぱらつたサラリーマンが、深夜アパートの自室に帰り、上着ズボン、靴をつけた儘ベットへもぐり込む。翌朝、けたたましい目覚し時計のベル、勤勉なる俸給生活者はとび起る、忽ち上着、靴、ズボンを脱いでシヤツとパンツの姿で靴を抱えて颯爽と街へとび出す。通行人の驚愕と嘲笑にはつと気付いて、自室にとび戻ると、急いでズボン上着、靴を身につける。そして、さて、おもむろに再びベッドにもぐり込んでしまう。正に機械化された人間の悲しき錯覚であり、生活のスプーナリズムである。高税に悩んだあるアメリカ人が、痛切なる悲鳴をあげたと言う、「月給と子供を收めるから、税金だけ返してくれ。」と。誠に以て、私達の身にも惻々と迫る生活スプーナリズムへの慨嘆と言つてよいであろう。

（女学部教授）

——一九五三・五・一〇——

【編集後記】

◇ロックフエラー財團ファーズ氏を迎えての懇談の席上、現在の日本の大学学制についての質問に同氏も聊さか返答に窮した態、アメリカでも同じ悩みとその苦しき所を述懐されたが、アメリカと同じフォームを移植しようとした所に無理があり、飛んだ所でその不備が露呈するのではたかろうか。やはりどこにでも盲点はあるというもの、早稲田大学PTA事件もこんな所に深い原因があつたのではないか。

◇希望に胸をふくらまして入学した学生が先づ取得単位の理解に頭を悩す。勿論その説明会等を開いて係員が声をからし説明しても一度で納得するのはほんのわずか、あとは理解のないまゝ卒業するまで単位々々とその亡霊に追われ、あげくの果てには単位不足で卒業出来ない破目に陥るといつた経過とあつては基礎学科も補助学科もあつたものではない。終始単位と相撲ととつているようなもの、気の毒という言葉が当嵌るのは学生である。旧学制へのノスタルジヤを感じる人の多くなるのも無理のない話。

◇今月は久振りに海外彙報の執筆をT・M・氏に願つて玉稿をいたゞいた他、締切前に原稿殺到、うれしい悲鳴を挙げる、来月もこの状況でありたいものと編集部一同御恵投を期待して居ります。

（O）

昭和二十八年五月十日印刷
昭和二十八年五月十五日発行

關西大學學報　第二五九號

一年誌代実費三〇〇円（送料共）

編集兼発行人　大阪市大淀区長柄中通二丁目一二番地　久井忠雄

印刷者　大阪市北区川崎町七　西井幾藏

印刷所　大阪市北區川崎町三七　株式会社ナニワ印刷所　電話堀川（七三〇）二番　（三一九三）番

発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　關西大学学報局　電話堀川（35）一七五六番　振替大阪二六七七二番

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和二十八年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）

RECENT ACQUISITIONS OF FOREIGN BOOKS

February through March, 1953.

GENERAL WORKS.

The Statesman's year-book 1952. MO59.3 S1 1-89

PHILOSOPHY & RELIGION

Marcel, Gabriel. Etre et avoir. 1935. 357p. 104 M3 1

Gabriel, Leo. Existenzphilosophie, von Kierkegaard bis Sartre. 1951. 416p. 114.1 G1 1

Glasenapp, Helmuth von. Die Philosophie der Inder 1949. 501p. 129 G1 1

Taylor, Margaret, E, J. Greek philosophy. 1947. 143p. 131 T1 1

Augustinus, Aurelius. The confessions of St. Augustine. 1920. 348p. 132 A2 1a

Jugnet, Louis. La pensée de Saint Thomas d' Aquin. 1949. 265p. 132 T1. J 1

Russell, Bertrand. Our knowledge of the external world, as a field for scientific method in philosophy. 1915. 245p. 133.3 R2 2

Whitehead, Alfred North. Adventures of ideas. 1933. 392p. 133.3 W1 2

Hartmann, Nicolai. Ethik. 1949. xxii, 823p. 150.1 H2 1

Holböck, Carl. Handbuch des Kirchenrechtes. 1951. 2vv. 195.2 H1 1-1/2

HISTORY.

Laski, Harold J. The dilemma of our times 1952. 271p. 204.3 L1 1

Sansom, George. Japan in world history. 1952 94p. 210.04 S1 1

Maspero, G. The passing of the empires, 850 B. C. to 330 B.C. 1900. 823p. 227.01 M1 1

Maspero, G. The struggle of the nations: Egypt, Syria, and Assyria. 1910. 795p. 227.01 M1 2

Renard, G. Life and work in modern Europe. 1926. 395p. 230.4 R1 1

Stephenson, Carl. Borough and town: a study of urban origins in England. 1933. 236p. 233.02 S1 1

Lamprecht, Karl. Deutshe Geschichte. 1909-1920. 15v. in 19. 234 L2 1-1/19

Huizinga, J. Herbst des Mittelalters : Studien über Lebens-und Geistesformen des 14. und 15. Jahrhunderts in Frankreich und in den Niederlanden. 1952. 384p. 235.02 H1 1

Mazour, A. G. Russia. 1952. 785p. 238 M5 1

Maspero, Gaston. The dawn of civilization : Egypt and Chaldaea. 242.01 M1 1

Morison, Samuel Eliot. The growth of the American republic. 1951. 2v. 253 M1 1-1a/2

Beard, C. A. The making of American civilization. 1948. 934p. 253. 001 B1 1

Cooper, Duff. Talleyrand. 1950. 481p. 289.35 T1. C 1

Van Valkenburs, S. Europe. 1952. 826p. 293 V1 1

Gray, G. D. B. Soviet land 1947. 324p. 293.8 G2 1

POLITICS

Small, Albion W. Adam Smith and modern sociology 1907. 247p. 301 S1 1

Communistic party, Soviet Union : M. Saburov. Report on the directives of the XIX party congress relating to the fifth five-year plan for the development of the U.S.S.R. in 1951-1955, October 8, 1952. 1952. 71p. N 310.238 C1 1

Jordan, E. Theory of legislation. 1952 486p. 312 J1 1

Brandt, Conrad. A documentary history of Chinese communism. 1952. 552p. 314.922 B1 1

United Nations. Everyman's United Nations. 1952. 388p. 319. 2 U1 1

Gluckstein, Ygael. Stalin's satellites in Europe. 1952. 333p. 319.2023 G1 1

Keeton, George W. China, the Far East and the future. 1949. 511p. 319.3022 K1 1

Latourette, Kenneth Scott. The American record in the Far East, 1945-1951. 1952. 208p. 319.3022 L1 1

Gurvitch, Georges. Sociology of law. 1947. 248p. 320.1 G4 1a

LAW

Cairns, Huntington. Legal philosophy from Plato to Hegel. 1949. 583p. 320.102 C1 1

Needham, Joseph. Human law and the laws of nature in China and the West. 1951. 44p. N320. 12 N1 1

Gierke, Otto. Deutsches Privatrecht. 1936. 897p. 320.14 G2 1-1

（23頁へ）

定價三十円